

長崎県文化財調査報告書 第 94 集

長崎県埋蔵文化財調査集報 XII

1989

長崎県教育委員会

発刊にあたって

このたび、長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅹを刊行することになりました。

今日、埋蔵文化財の発掘調査やその研究の積み重ねによって過去の人々の暮らしが明らかになってきております。

発掘調査によって得られた資料は、私達の先人が残した貴重な情報源であります。遺跡には、これらの資料がそのまま保存されているだけに、取り扱いについては慎重でなければなりません。

開発事業に先立ち、遺跡の保護・保存については、関係各機関へ御協力をお願いしているところであります。やむをえず発掘調査にあたらねばならない場合もあります。

今回収録しました小浜町大屋敷遺跡、鷹島町三代遺跡につきましても数回の協議を重ね、計画変更ができない部分の発掘調査を実施いたしました。

調査にあたっては、詳細な記録を行っており、その成果については、本書に述べるとおりであります。

この報告書が文化財に対する理解と愛護を深め、歴史や文化をさぐるようがとなれば幸いであります。

平成元年3月31日

長崎県教育委員会教育長 伊藤昭六

総 目 次

I 大屋敷遺跡.....	1
II 三代遺跡.....	41

凡 例

1. 本書は、長崎県教育委員会
が行った下記遺跡の発掘調査
報告書である。

I 大屋敷遺跡 小浜町
II 三代遺跡 富島町

2. 本書の編集は町田利幸・村
川逸朗が担当した。
3. その他詳細は各稿例言を参
照されたい。

I 大屋敷遺跡

——南高来郡小浜町所在——



例 言

1. 本書は、昭和56年度・58年度・61年度に実施した、長崎県南高来郡小浜町山畠大屋敷上中谷所在の発掘調査報告書である。
2. 調査は小浜町教育委員会が主体となり、長崎県教育庁文化課が協力して実施した。
3. 本書の執筆は分担して行い、執筆者名は本文目次に記している。
4. 調査担当者は下記のとおりである。

昭和56年度分布調査

副島 和明 文化財保護主事（現主任文化財保護主事）

宮崎 貴夫 ✕ (✕ ✕)

昭和58年度範囲確認調査

宮崎 貴夫 文化財保護主事（現主任文化財保護主事）

町田 利幸 文化財調査員（現文化財保護主事）

昭和61年度本調査

町田 利幸 文化財保護主事

伴 繕一郎 文化財調査員

5. 調査時の写真撮影は町田、整理時の遺物写真は宮崎・伴による。
6. 本書の編集は町田が行い、伴が補佐した。

7. 出土遺物は、現在県文化課立山分室で保管しているが、本書刊行後は小浜町教育委員会に移管の予定である。

本文目次

I 調査に至る経緯

- | | |
|----------------------|---------|
| 1. 分布調査及び範囲確認調査..... | 1 (別 島) |
| 2. 本 調 査..... | 1 (町 田) |

II 遺跡の立地と環境..... 2 (町 田)

III 調 査

- | | |
|---------------------|----------|
| 1. 範囲確認調査の概要..... | 4 (宮 峠) |
| 2. 土層の状況..... | 9 (も) |
| 3. 小 結..... | 9 (も) |
| 4. 本調査の概要..... | 9 (町 田) |
| 5. 土層の状況..... | 10 (伴) |
| 6. 小 結..... | 15 (町 田) |
| 7. 遺 物..... | 16 (伴) |
| (1) 先土器時代の石器..... | 16 (も) |
| (2) 楽文時代の石器..... | 16 (も) |
| (3) 楽文時代の土器..... | 23 (も) |
| (4) 弥生・古墳時代の遺物..... | 25 (町 田) |
| (5) 中世・近世の遺物..... | 25 (宮 峠) |

IV ま と め..... 30 (町 田)

挿 図 目 次

第1図 周辺の遺跡	3
第2図 範囲確認調査区域図	4
第3図 範囲確認調査・遺構・土層断面図(1/60)	5
第4図 調査区配置図(1/1,500)	7
第5図 本調査区配置図(1/400)	10
第6図 本調査区遺構配置図(1/80)	11
第7図 本調査土層図(1/80)	13
第8図 先土器時代・縄文時代の石器①(2/3)	17
第9図 縄文時代の石器②(1/2)	18
第10図 縄文時代の石器③(2/3)	20
第11図 縄文時代の石器④(2/3)	21
第12図 縄文時代の石器—石材別依存度	22
第13図 縄文時代の土器(1/2)	23
第14図 弥生・古墳時代の土器(1/2)	24
第15図 銭(TP-21 出土)(2/3)	25
第16図 中世陶磁器(1/3)	26
第17図 長崎県内・弥生・古墳時代の銭出土地	29

表 目 次

表1 周辺の遺跡	3
表2 縄文時代の石器一覧表	22
表3 中・近世土器陶磁器出土数量表	27
表4 鉄津出土数量表	27
表5 弥生時代から古墳時代の銭出土地	29

図 版 目 次

図版 1	遺跡遺景及び範囲確認調査	33
図版 2	範囲確認調査TP-8・18区	34
図版 3	範囲確認調査TP-32・8・18区土層	35
図版 4	本調査及び石鎌・pit 2粘土塊出土状況	36
図版 5	本調査ドーナツ状構造及びPit検出状況	37
図版 6	先土器・縄文時代の遺物	38
図版 7	弥生・古墳時代の土器(1/1)	39
図版 8	中世土器・陶磁器(2/3)	40

I 調査に至る経緯

1. 分布調査及び範囲確認調査

小浜町山畠地区に農業振興のため、農道整備・農地区画整理・農地保全（排水路整備）等の基盤整備である県営畠地帯総合土地改良事業（総面積240ha）を小浜町が事業主体として計画策定し、当該計画区域内の埋蔵文化財についての分布調査を昭和57年3月17日～3月18日の2日間に渡り実施した。

当初、2箇所の遺跡が周知されていたが、鬼塚古墳については全国遺跡地図の記載違いと判明した。また、縄文時代の包蔵地である鴻頭遺跡は、周知の範囲よりもかなり広く分布していることがわかった。

調査で新たに、縄文時代晚期の土器片や石器類が散布する大屋敷遺跡が発見された。

以上の分布調査結果に基づいて、県教育庁文化課、県農林部耕地課、小浜町、小浜町教育委員会の四者で遺跡の取扱いについての協議を重ねた結果、鴻頭遺跡は設計変更で現地保存することになり、大屋敷遺跡については、範囲確認調査を実施しその結果を踏まえて再度協議を行うことになった。

2. 本 調 査

昭和61年5月8日、県文化課と県耕地課及び鳥原振興局土地改良課との間で、県営畠地帯総合土地改良事業（小浜町山畠地区）に係わる大屋敷遺跡の取扱いについて、協議を行なった。

その結果は、①大屋敷地区は計画変更して、遺跡の部分は盛土で回避する ②排水路については、1m位の切りになるため調査が必要である ③調査費については、58年度の範囲確認調査と同様に配分する ④62年度山畠地区的土地改良事業は8haあり、早急に対応してほしい等であり、②の排水路部分についての調査を昭和61年10月15日～10月20日に実施した。

II 遺跡の立地と環境

遺跡の所在する小浜町は、島原半島中央部西海岸に位置し、雲仙国立公園を含み対岸には野母半島を眺望する。

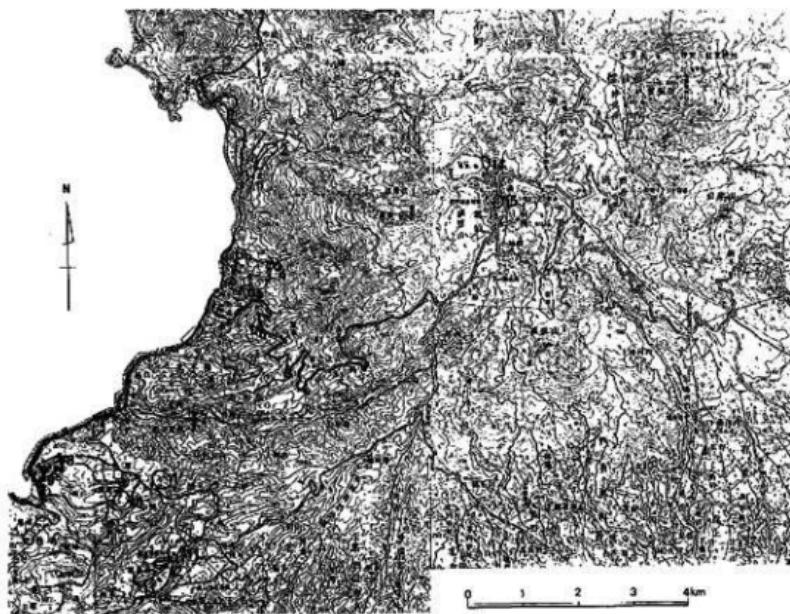
町内の地質は、第三紀層から第四紀層にかけて火山活動が続いたといわれ、そのため角閃石安山岩で形成されている。

地形的には、北部から東部は国見・九千部・普賢・妙見・野岳など多くの急峻な山岳によって囲まれている。山岳から伸びた稜線は海岸と接する部分で急激に落ち込んでおり、そのため水田に適した平坦地が少ない。また、河川の発達も認められない。しかし、南部の金浜海岸より東南へ行った山畑地区は、傾斜の緩い台地を形成しており、農業生産（主に馬鈴薯）を基盤とした集落を形成している。

自然環境を見渡すと、国指定の特別名勝温泉岳、国指定天然記念物のシロドウダン群落、野岳イヌクイグ群落、普賢岳紅葉樹林、原生沼野植物群落、池の原ミヤマキリシマ群落等多くの貴重な植物が繁茂している。

町内には15箇所の遺跡がある。1は、縄文時代から弥生時代の土器片や石器が採集されている。3は朝日山団地造成に伴って、発掘調査を県文化課が行ない、遺構に炉跡1基、集石構2基を検出している。遺物には、縄文晩期の黒色研磨土器、リボン状突起を有する粗製土器、刻目突帯文、組織痕土器等が出土している。また、石器では打製、磨製の石斧が出土している。4は昭和36年「日本考古学協会西北九州総合調査特別委員会」が行なった学術調査で、柱穴、火跡を検出しておらず、住居跡と考えられている。朝日山遺跡と同時期の土器・石器が出土している。5は小浜城跡と推定されている所で、島原半島西口の要所を占めていた。城主は、古代末期に活躍した日向太郎通良の後裔で、多比良、大河、藤木、白石氏などと同族である。6雲仙登山道の旧料金徴収所付近（標高140m～150m）の畠地に黒曜石剝片が散布する。7椿型キリシタン墓碑がありこの他にも、県指定に8（花十字文半円柱蓋石型1基と切妻蓋石型3基）、9（花十字文半円柱蓋石型1基）があがっている。また、キリシタン関係では、徳川幕府の行なった禁教令（1613年）によって、信者が雲仙の地獄賣（寛永四年～九年）の犠牲となっている。10は大屋敷の西南約500mの地点に黒曜石剝片が散布する。11～13は諏訪池周辺にまとまりのある遺跡である。旧石器から縄文晩期にかけての石器、土器の遺物が採取されている。14縄文前期の土器が採取されている。15間山は大宝元年と伝えられ、宝亀九年（778年）焼失。延宝八年（1681年）一乗院となって再建されるが、明治時代に焼失、現在の建物は、大正3年再建されたものである。（第1図）

大屋敷遺跡は、標高140m～170mの町内の南部に位置し、所在は南高来郡小浜町大屋敷上中谷にある。南西方向に橘湾を眼下に、北東には妙見・普賢岳を眺望する。周辺の現状は馬鈴薯の畑作地帯となっている。谷部は、諏訪池より引かれた水によって階段状に水田が営まれている。



第1図 周辺の遺跡

表1 周辺の遺跡

番号	名称	種別	時代	
1	大屋敷遺跡	散布地	绳文	大屋敷上中谷
2	山領遺跡	散布地	绳・弥	字鬼石・塚畠他
3	朝日山遺跡	包藏地	绳文	北本町
4	小浜黒谷遺跡	散布地	*	* 朝日山
5	小浜城	城跡	中世	南本町名城山
6	新切遺跡	散布地	绳文	新切木平
7	小浜町荒田のキリシタン墓碑	キリシタン墓碑	近世	本場東中島41
8	小浜町手之元のキリシタン墓碑	*	中・近世	飛子名字上手之元414
9	小浜町椎山のキリシタン墓碑	*	近世	* 字椎山3464
10	湾頭遺跡	散布地	绳文	山指満頭
11	諏訪池A遺跡	*	先・绳	諏訪野
12	諏訪池B遺跡	*	*	*
13	諏訪池C遺跡	*	绳文	*
14	別所遺跡	*	不明	雲仙別所
15	一乗院遺跡	寺院跡	中世	* 一乗院境内

III 調 査

1. 範囲確認調査の概要（第2図）

大星敷遺跡の範囲確認調査は、町教育委員会が主体となって、県文化課が調査を担当し、昭和58年8月1日～8月20日の20日間実施した。

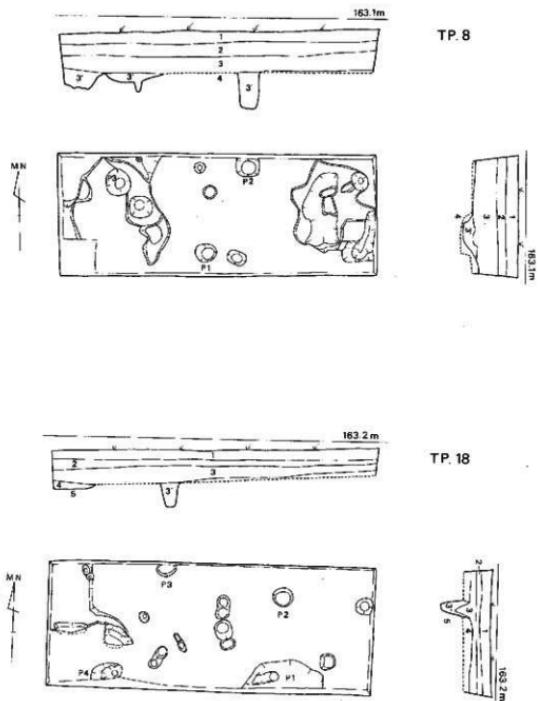
工事対象工区(3ha)に、25m方眼を基本として2m×5mの試掘場を30ヶ所設定し、さらに補完のために2ヶ所を追加して、総数32ヶ所の試掘場（計320m²）を発掘調査した。その結果、旧石器時代～近世に至る遺物がパンコンテナ2箱分出土し、中世建物の柱穴等の遺構が検出された。

出土遺物は、遺物の項で詳述されるが、先土器時代の石器、縄文時代晩期の上器・石器、弥生時代～古墳時代の土器と銅鏡片、中世～近世の土器・陶磁器、石鍋片、鐵滓と古錢1枚が出土している。

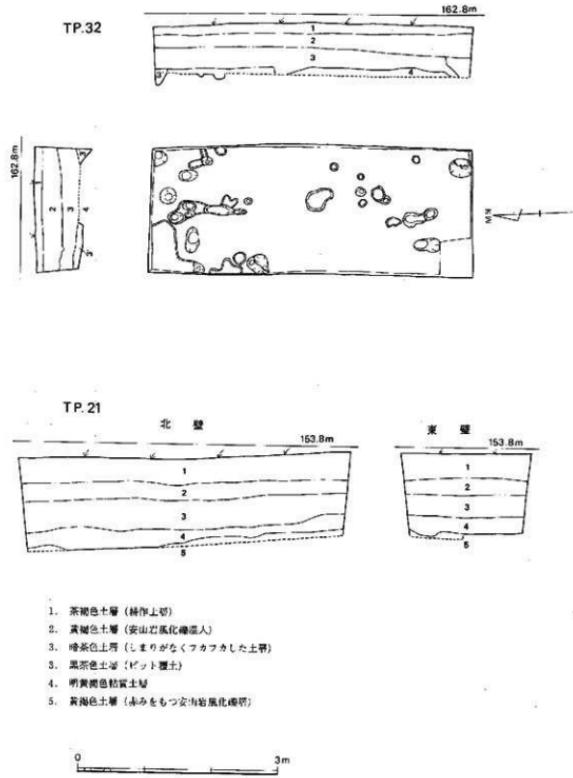
柱穴等の遺構が検出されたのは、TP-8、TP-18、TP-32である。柱穴は、径30～40cm、深さ30～70cmほどあり、地山の4層を掘り込んで造られている。覆土は、黒茶色の軟弱な土層である。TP-8のpit-1から古錢1枚、TP-18のpit-1・3・4から炭化物が出土している。



第2図 範囲確認調査区域図



第3図 輪廓確認調査・透構・土層断面図 (1/60)





第4図 調査区配置図 (1/1,500)

2. 土層の状況（第3図）

土層は5層の堆積が見られた。第1層は、耕作土層でフカフカの茶褐色土である。第2層は、安山岩の風化礫（2~3cm大）を混入する黄褐色土層である。第3層は、しまりのないフカフカした暗茶色土層である。若干中世遺物出土。第4層は、明黄褐色粘質土層で、無遺物層である。第5層は、赤みをおびた安山岩の風化礫の黄褐色土層である。

TP-11は削平が著しく地表面から40cmほどで4層面があらわれたが、深いところではTP-21は地表面から140cm下に4層面が検出された。

第3層から遺物は少量しか出土していないが中世堆積層と考えられ、柱穴等のpitは第4層を切り込んで作られている。しかし、縄文時代～古墳時代の遺物包含層・遺構は確認できなかつた。銅鏡片はTP-21の第2層から出土したが、混入品であり弥生時代～古墳時代にかけての箱式石棺墓等に副葬されていた可能性をもつてゐる。

3. 小 結

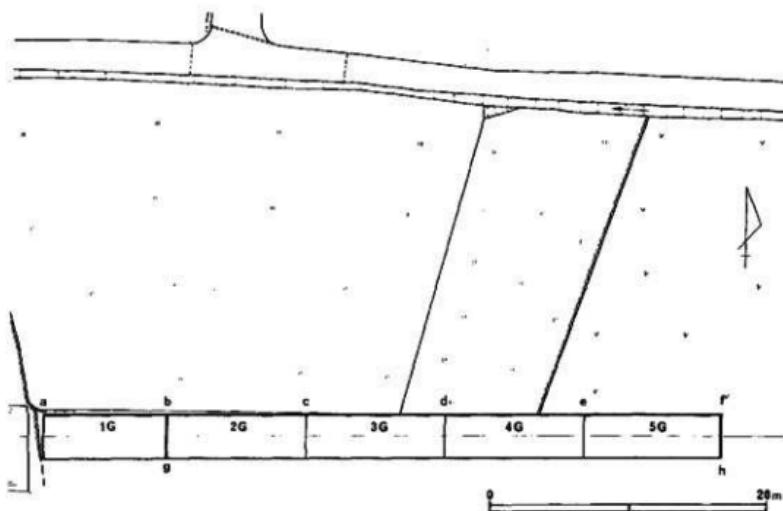
以上の範囲確認調査の結果に基づいて、柱穴等が確認され中世建物跡が存在することが予想される834番地、835番地（第2図網点部分）の1,200m²については、盛土による保存をしていただきたいこと、当該地域が掘削・切土あるいは構造物等の設置がなされる場合には本調査を実施し記録保存を行う必要があること、また銅鏡片の出土によって工事対象地区に箱式石棺墓等の遺構が存在する可能性があるため、工事中に石棺等が発見された場合には速やかに連絡し協議することを、関係機関へ通知した。

4. 本調査の概要（第4・6図）

遺跡は、58年度範囲確認調査の結果から小浜町山畠823番地付近を中心に広がりを持つと考えられ、排水溝工事により損壊される部分（33m×3.5m）の調査を実施する予定であった。しかし、既工事部分に遺物の散布が認められたため調査予定区域を西側へ17m延長し、50m×3.5mの範囲を実施した。

調査区は、排水溝センター杭を中心に10m×3.2mのトレーニングを5箇所設定し、西より1G・2G……5Gと記号を付した。

遺構には、建物跡が4G・5G区暗灰色黒色土の覆土を持つものと、1G・2G・3G区に淡灰黄色土を覆土を持つものに区別できる。その内、1G・2G区に検出した柱穴は約2mの間隔を置いて6個東西に並んだ状態で検出された。1G区の柱穴からは、pit4が陶器、pit1が土師器、pit2に粘土塊の出土があり5G区pit2より鉄片pit3からは炭化物の出土があった。



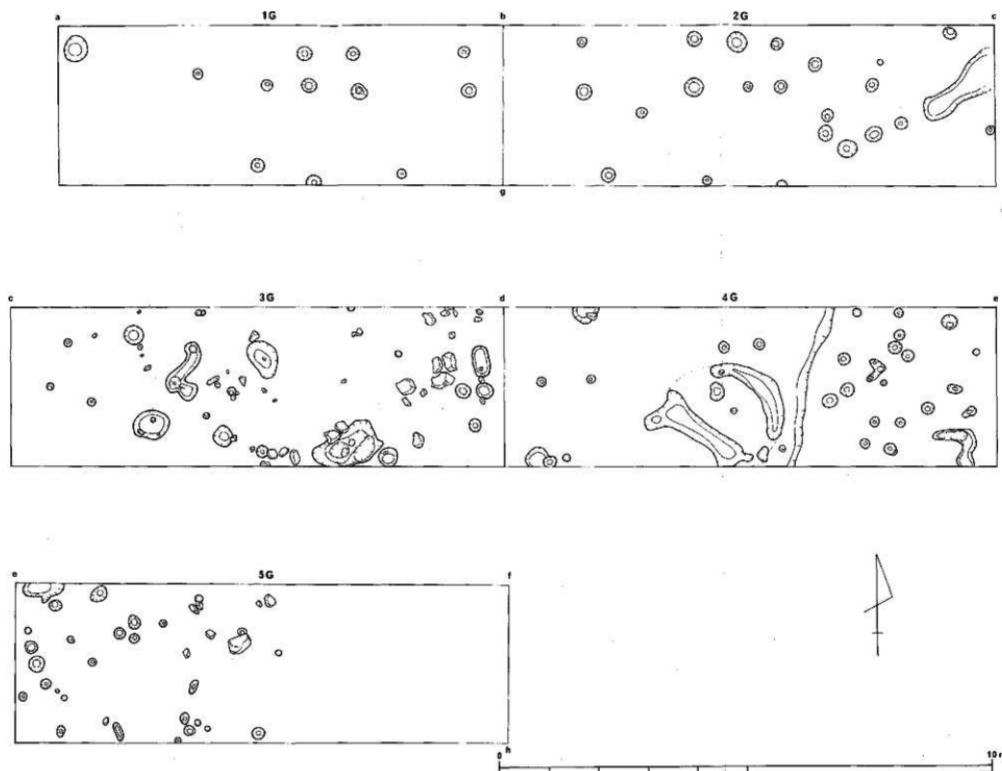
第5図 本調査区配置図 (1/400)

また、4G区の第4層地山からはドーナツ状遺構が観察された。

5. 土層の状況（第7図）

1986（昭和61）年に発掘調査した地域の土層堆積状態は、基本的に4つの層に分けることができた。第1層は表土層で、上部の耕作土と下部の水田の底土に分かれる（土層図においてはあえて区別せず、全体を表土として扱った）。第2層は黄褐色の粘質土層でややしまっている。第1調査区（1G）に厚く認められ、東の第2調査区（2G）、第3調査区（3G）にいくに従い薄くなり、第4調査区（4G）の途中以降はなくなる。縄文時代の遺物～近世にまでおおよぶ多様な遺物が見られることから、旧地形の段階、少なくともこの付近一帯が開墾されるまでの表土であった可能性も考えられる。第3層は暗茶褐色の粘質土で堅くしまっている。遺物は、縄文時代～中世の遺物などが多少認められる程度である。第5調査区の途中でなくなる。第4層は下の地山との漸移層で、明黄褐色土である。遺物は認められない。

本遺跡周辺一帯は、畑地・水田が大半を占め、山畑地区の民家も一部にかかる。従って、ほとんどの地域において、耕作または削弊を受けていると言っても過言ではない。しかも、西の



第6図 本調査区遺構配置図(1/80)

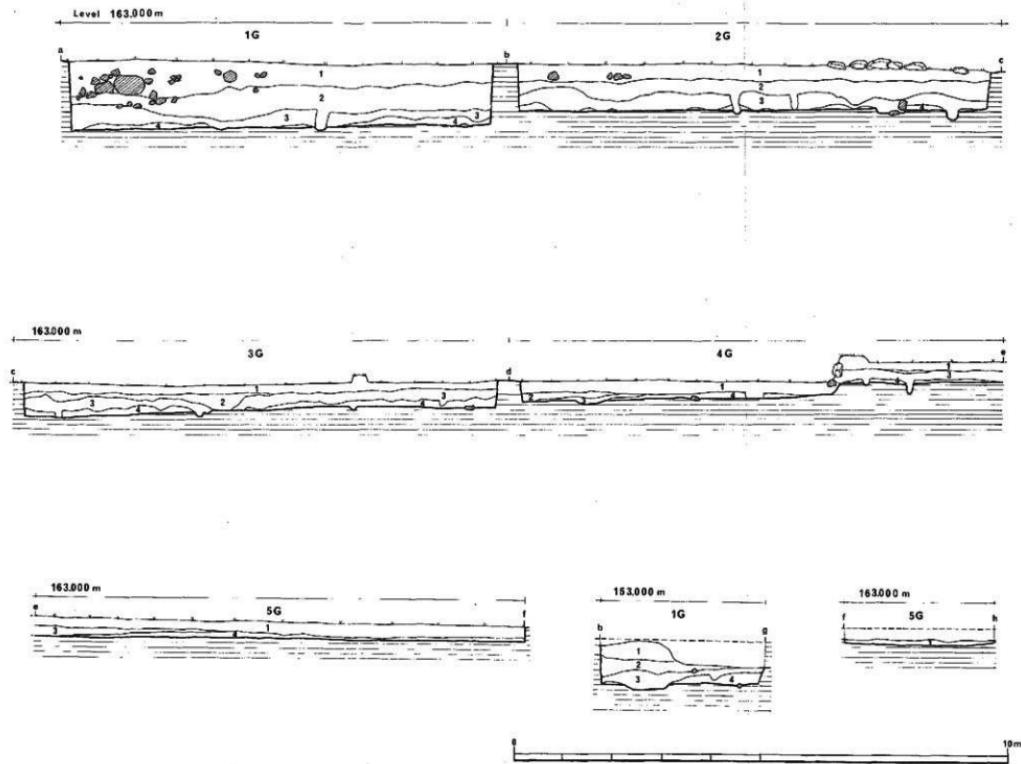


図7 本調査土層図(1/80)

方の第1調査区(1G)・第2調査区(2G)は全体に厚く堆積するが第4調査区(4G)中ほどで段がつき第5調査区(5G)に至っては表上直下が地山となる。また、この一帯は北側に現在墓地として利用されている小丘陵や、南東側の民家手前まで舌状の台地先端が迫っており、その間で浅い谷を形成していることから、先土器・縄文・弥生・古墳時代等の遺物は流れ込んでいるものが多いものと考えられる。

6. 小 結

本調査では、縄文・弥生・中世の時期にわたって遺物の出土があったが、遺構として確認できたものは中世の建物跡のみであった。

中世の建物跡は、造られた時期が1G・2G・3G区と4G・5G区とで差異がとらえられ、検出層位、及び出土遺物から1G・2G・3G区の建物跡が新しいものと考えられる。

しかし、今回の調査は遺跡のごく一部であるため、建物跡の全容を知りえないが、遺構の広がりは調査区域周辺に及ぶものと考えられる。

参考文献

1. 長崎県、雲仙の自然と歴史 「雲仙火山」 昭和59年 (1984)
2. 長崎県教育委員会 「長崎県の文化財」 昭和62年 (1987)
3. 小浜町教育委員会 「朝日山遺跡」 小浜町文化財調査報告書第1集 昭和56年 (1981)
4. 賀川光夫 「九州考古学04」「島原半島の考古学的調査第二次概報(昭和36年度)」 (1961)
5. 小浜町 「小浜町史談」 小浜町史談編纂委員会 昭和53年 (1978)

7. 遺 物

本遺跡より出土した遺物は範囲確認調査と発掘調査分を合わせて、約1,250点に達する。時代別に分類すると、先土器時代の石器(ナイフ形石器)が1点、縄文時代の石器246点・土器160点、弥生～古墳時代にかけての土器が約200点(破片が細かいうえ風化も著しく不明なものがほとんどである)、鏡片1点・中世の遺物150点、石鍋片5点・近世の遺物350点・その他不明(炭化物や近世以後の遺物など)のものが120点である。なお、中世を除く、各時代の遺物は明確な包含層は認められず表土出土のものも多い。

(1) 先土器時代の石器 (第8図1)

1は灰青色の黒曜石製(黒曜石B)のナイフ形石器の先端部片である。およそ4cm前後の長さが想定される。全体にバティナが著しく認められ、やや褐色がかっている。TP-8表土出土。

(2) 縄文時代の石器

246点出土した縄文時代の石器は、石鏃8点・スクレイバー1点・使用痕のある剝片9点・石斧4点・磨石1点・凹石1点・剝片210点・石核12点である。

石鏃 (第8図2～9)

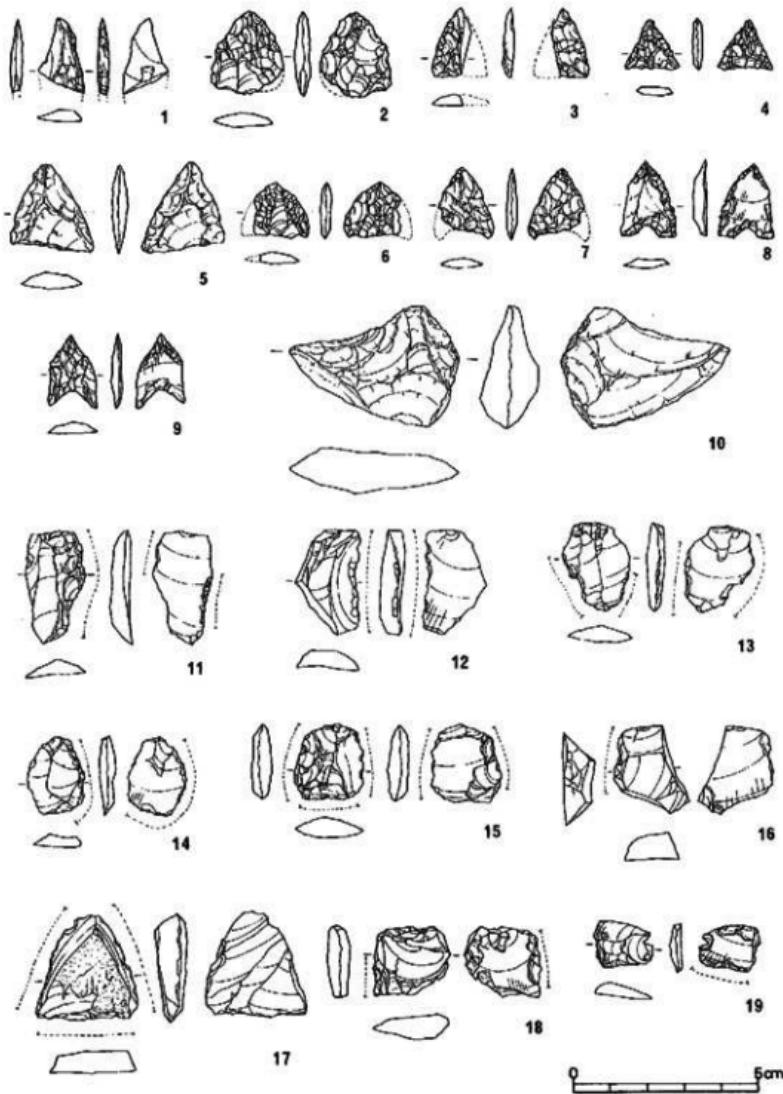
2・3・4・6・7・9は漆黒色の黒曜石製(黒曜石A), 5は安山岩製, 8は黒曜石B製である。2は一部を欠損する。第28調査区(TP-28)の表土より出土。全体に丸みを持つ感じで、基部はゆるく張り出し(外湾)でいる。3は黒曜石B製、半分近くを欠損する。基部はほぼ一直線状になるものと考えられる。裏面は平坦となり、断面形は薄いカマボコ形の状態をなす。TP-22第2層より出土。4は比較的小形のもので、正三角に近い形をなす。基部は若干内湾する。TP-8表土より出土。5は二次加工がやや粗雑でしかも不均整な形をなす。表探資料である。6は幅広のもので、基部は若干内湾する。TP-29、第2層より出土。7は片脚の一部を欠損する。全体に薄い仕上りで、基部は多少内湾する。TP-21、第2層より出土。8・9は裏面に主要剝離面を大きく残している、剝片鏃である。8は、1986(S61)年発掘調査時の第1調査区(1G), 第2層より出土。9はやや肩が張った感じのするものでTP-21、第2層より出土。

スクレイバー (第8図10)

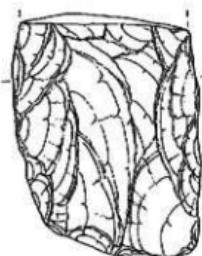
スクレイバーとして扱ったもので、「く」の字状の刃部を裏面から施す。全体にバティナが著しく、黄褐色をなす。15gを計る。TP-25、表土出土。

使用痕のある剝片 (第8図11～19)

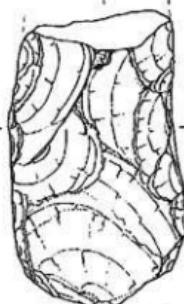
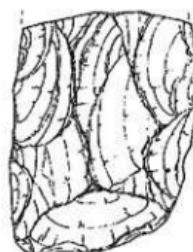
17のみ黒曜石B製、残る8点は黒曜石A製である。全体的に小形の剝片が目立つ。また16が平坦な打面より剝離されているほかはすべて多少の打面調整を施したうえで剝片取りを行なっている。11は継長剝片の左右長側縁を使用、特に片側の使用度が多かったものと考えられる。



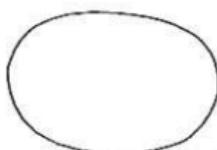
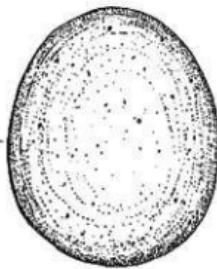
第8図 先土器時代・縄文時代の石器① (2/3)



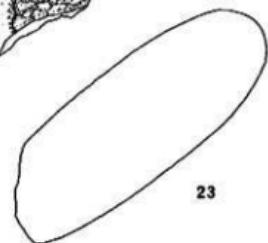
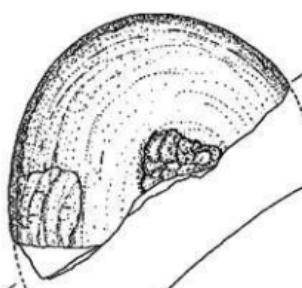
20



21



22



23



第9図 繩文時代の石器(2) (1/2)

TP-21, 第2層出土。12は縦長剝片の片方の長側縁のみを使用しており、表裏にその痕跡が認められる。TP-9, 表土出土。13は左右の両側縁を使用、表裏に痕跡が認められる。TP-9, 表土出土。14は表裏それぞれ片方の側縁に使用痕が認められる。剝片の全体を使用しているとも言える。TP-4, 表土出土。15は小形の幅広の剝片でほぼ全体に使用痕が認められる。部分的に多少二次加工が施されているが、一応剝片として扱った。TP-15, 表土出土。16はやや厚手の剝片で断面形も台形状となる、一側縁表面のみに使用痕が顕著に認められる。TP-21, 第2層出土。17は平面形が三角形状をした剝片で表面に大きく自然面を残す。それぞれの三側縁表面のみに使用痕が認められる。TP-12, 表土出土。18は幅広剝片の一側縁表裏に使用痕が認められる。TP-22, 表土出土。19は小形の幅広剝片で下端表面のみに使用痕が認められる。TP-21, 第2層出土。

石斧（第9図20・21）

図化記載した安山岩製打製石斧2点の他にも、蛇紋岩製磨製石斧の小破片が2点出土している。よって3点もしくは4点の出土であるが、その2点（蛇紋岩片）は写真記載のみとした。20・21とともに上端を欠損し風化が著しい。しかも非常に粗雑な二次加工である。20は原寸値で長さ8.5cm、幅6.5cm、厚さ3cm、重さ195gである。TP-6, 表土出土。21は長さ10.5cm、幅6.0cm、厚さ3.3cm、重さ218gである。TP-5, 第2層出土。2点とも長さ15cm前後の大きさのものであろう。蛇紋岩のものは、小さい方の破片がTP-21, 第2層出土、残る一つはTP-29, 表土出土である。

磨石（第9図22）

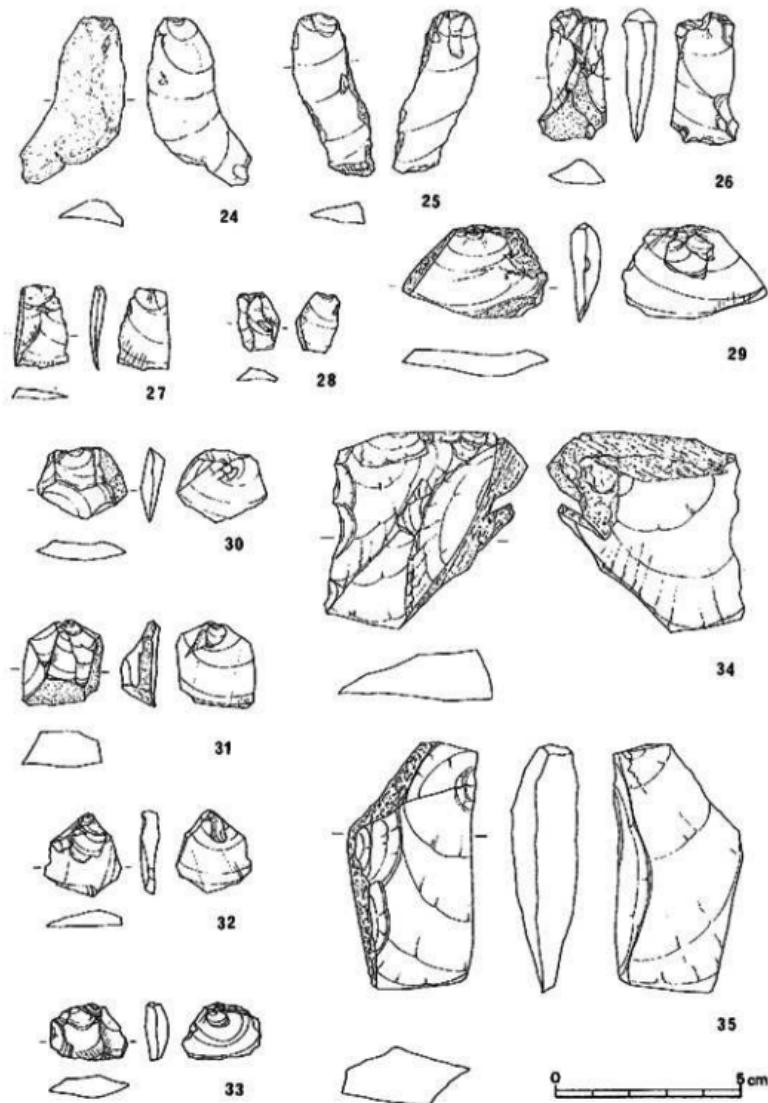
風化が進み全体にサラついた感じである。卵形を呈し、長径9.3cm、短径7.5cm、厚さ5.0cm、重さ538gである。TP-10, 表土出土。

凹石（第9図23）

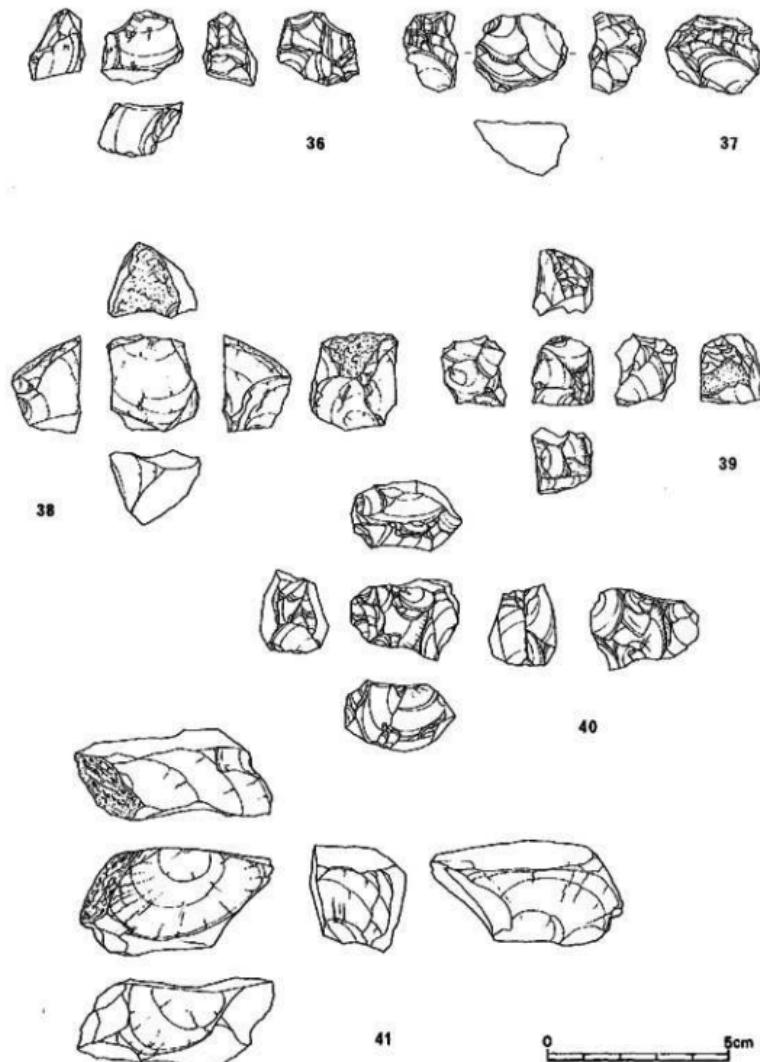
ほぼ半分を欠損する、直径12cm前後の円形もしくはそれに近い形を呈していたと考えられる。一応、凹石として扱ったが、表裏面は研磨の痕跡があり、また周縁には敲打痕も認められることから、磨石・敲石としての機能も兼用されたものと考えられる。365g, TP-6, 表土出土。

剝片（第10図24～35）

210点中12点を選び図化記載した。剝片は安山岩製のものは大形のものもあるが、黒曜石製においては先の使用痕のある剝片のところでも述べたように小形のものがほとんどで、かなり貧弱な様相をうかがわせる。縦長剝片が数点見られるほかは、長幅1.5～2.0cmが大半を占める。また、それらのおおくは表面の一部に自然面を残すものが多い。24～29・31～33は黒曜石A製、30は黒曜石C製、34・35は安山岩製である。なお、25・26・28・30・32・33は打面調整の痕が認められ、24・27は平坦打面、31・34・35は自然面の打面より剝片剝離を行なっている。



第10図 縄文時代の石器③ (2/3)



第11図 繩文時代の石器④ (2/3)

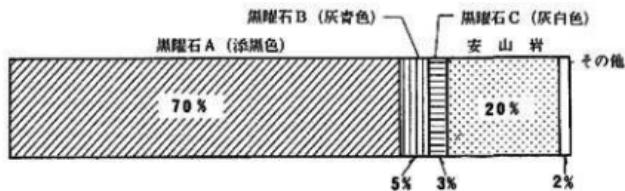
石核（第11図36～41）

12点中半数の6点を選び図化記載した。36・37・39・40は黒曜石A製、38は黒曜石B製41は安山岩製である。当然のごとく、石核においても剝片と同様に貧弱な様相と言えよう。黒曜石製のものは全て残核で、一定の剝片剝離過程が認められるものはない。多方向より打面を転移しつつ小形の剝片剝離を行なっている。また、いくつかのものには部分的に自然面の残るものもあり原石自体もさほど大きくなかったことは察せられる。

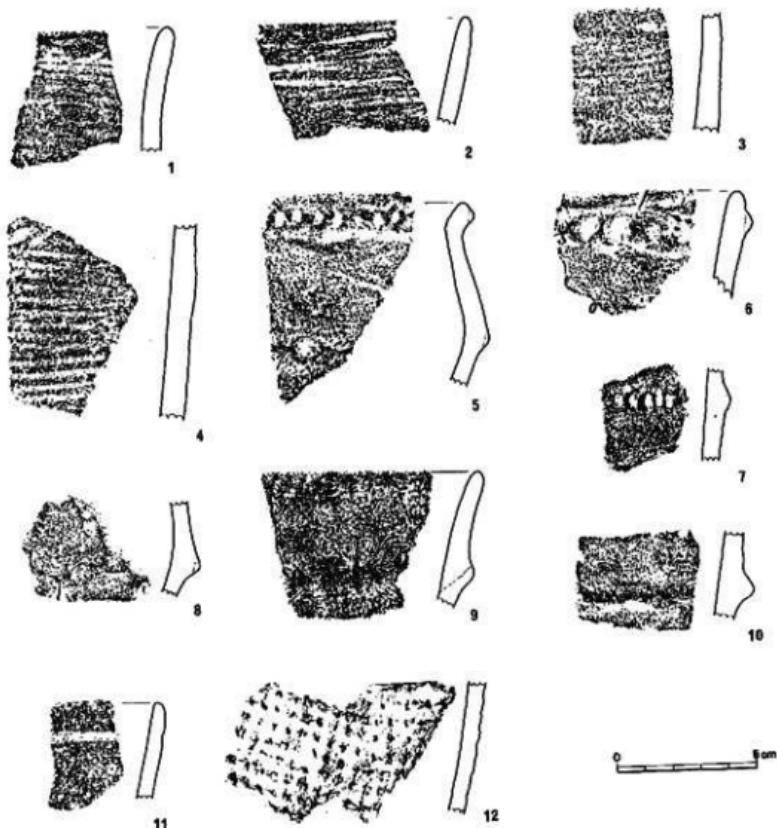
縄文時代の石器全体をみてみると、圧倒的に黒曜石Aに対する依存度が高く約70%を占める。次いで安山岩20%，黒曜石B 5%，黒曜石C 3%，その他2%となる。安山岩は在地のものであるが、黒曜石Aつまり漆黒色の黒曜石は腰岳産（佐賀県伊万里市）のものと考えられる。また、小形の剝片が多いながらも、その鋭い側縁を利用して刃器として使用し刃こぼれ状の痕跡が認められるもの（使用痕のある剝片）が、比較的に多く出土する観がある。加えて、石鎚やスクレイパー、凹石の出土から考えて、狩獵・採取の生活の一端をうかがうことができよう。

表2 縄文時代の石器一覧表

器種	黒曜石A	黒曜石B	黒曜石C	安山岩	その他	合計
石鎚	6	1		1		8
スクレイパー				1		1
使用痕のある剝片	8	1				9
石斧				2	蛇紋岩2	4
磨石					砂岩1	1
凹石					砂岩1	1
剝片	149	9	7	45		210
石核	9	2		1		12
合計	172	13	7	50	4	246



第12図 縄文時代の石器一石材別依存度 (246点=100%)



第13図 縄文時代の土器 (1/2)

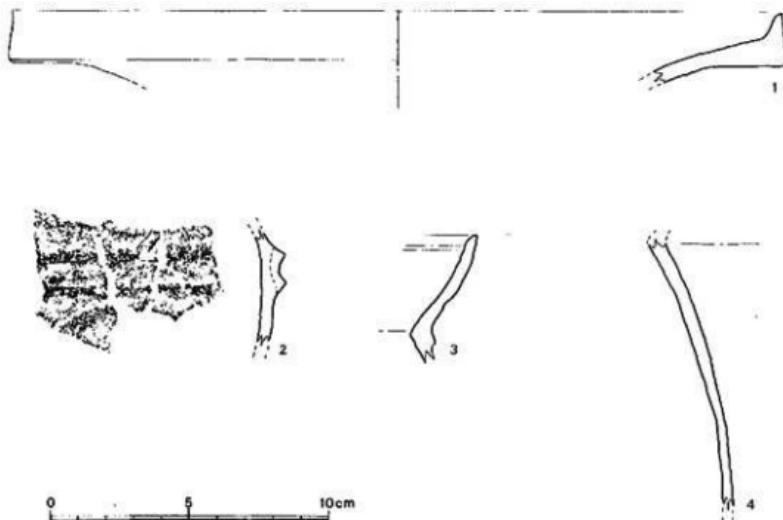
(3) 縄文時代の土器 (第12図 1~12)

縄文時代の土器として判別した160点あまりの土器は、著しい風化作用を受けたものが大半を占め、文様や器形のわかるものは十数点にすぎなかった。12点を図化記載した。

1~4は横位の条痕を基本文様としている。4点とも胎土に細かな砂粒子を含む。1・2は口縁部片、3・4は胴部片であるが器形ならびに大きさなどは不明である。また、2・3は裏面にも横位条痕が風化を受ながらも若干認められる。1はTP-6、第2層出土、2はTP-6、表土出土、3はTP-29、第2層出土、4はTP-15、第2層出土。5は甕の口縁部片で、胎土に

は細かい砂粒子や多少の雲母を含む。焼成は良好で全体に黄褐色をなす。口唇直下と胴部上半の屈曲部に突帯を有する。口縁の突帯の刻目は小さく深いのに対し、胴部上半の刻目は幅広でやや浅い。TP-6, 第2層出土。なお8は壺の胴部上半片であるが、胎土・色調・刻目の状態などから5と同一固体である可能性が大きい。TP-6, 第2層出土。6は口縁部片で口唇直下に太い刻目の突帯を持つ。細かな砂粒子を含み、茶褐色をなす。TP-6, 第2層出土。7は胴部片で細身のやや深い刻目の突帯を有する。黄褐色で、砂粒子・雲母を含む。TP-21, 第2層出土。9は表裏とも無文で、口縁下に土器整形の際にできた大きな屈曲部を持つ。色調は褐色で、胎土に砂粒子・雲母を含む。TP-15, 第2層出土。10は胴部の小片で刻目のない突帯を持つ。無文で、表面は暗褐色、裏面は褐色をなす。TP-21, 第2層出土。11は口縁部の小片で、口唇直下に比較的幅広の横位の浅い凹線を持つ。黄褐色をなし、胎土には細かな砂粒子・雲母を含む。全体に風化が進む。TP-7, 表土出土。12は組織痕土器でTP-21, 第2層から出土し三点接合した。表裏とも全面に黒褐色をなし、胎土に砂粒子・雲母を多量に含む。

以上のように縄文時代晩期の土器が主体をなす。特に、晩期の中においても際立って古いものではなく、形式的にはほぼ同じ、あるいは近い頃のものであろう。いわゆる、晩期Ⅱ式からⅢ式にかけての黒川式あるいは礫石原式から原山式に至るものと考えられる。また、風化作用の影響なども加味されるが粗製土器がほとんどで、精製された研磨土器はなかった。



第14図 弥生・古墳時代の土器 (1/2)

(4) 弥生・古墳時代の遺物(第14・15図1~5)

58年度の範囲確認調査で、弥生・土師式土器片約200点出土があり、本調査では、約30点の出土があった。2回の調査とも小片の土器が多く、図示できたのは4点である。そのほかに鏡片が1点出土した。

1は復元口径27.5cmの複合口縁壺である。内外面赤褐色を呈し、立ち上がり直角にII縁部へ移行する。口縁端部内面斜めに傾斜する。胎土に長石石英、黒雲母混入。2内外面ともに淡赤黄色をなし、胴部に三角突帯貼付け2本有す。胎土には黒雲母、長石混じり、焼成やや良。3外面明黄赤褐色、内面暗赤褐色で、胎土に黒雲母、長石を含む。土器表面ザラツク。II縁部から内窓して、肩部へ移行し、II縁端部内面若干フクラミかげんである。

4外面暗黄褐色、内面明黄褐色、頸部移行部で欠損する。ハケによるなで、内面指押えの後ハケ整形行なう。

以上であるが、1と2は弥生時代後期の土器で、南高来郡北有馬町今福遺跡でも出土している。3・4は古墳時代4世紀前半の土師式土器と考えられる。

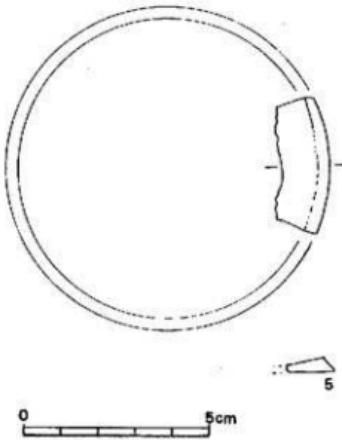
つぎに、5は鏡片外区が残る程度で、推定直径8.6cmを測る。外区での厚み4mm。鏡質は、鑄上り質とも良好である。文様部分内区を欠損しているため時期をきめかねるが、出土土器から弥生後期から古墳時代前期が想定される。

(5) 中世・近世の遺物

中・近世の遺物は、土器・陶磁器類、滑石製石鍋、古銭・鉄片・鐵滓などの金属器類などがある。

土器・陶磁器(第16図、図版8)

中世土器・陶磁器が164点、近世陶磁器が318点の計482点出土している。近世陶磁器は、第1・2層に限られ、第3層からの出土は見られない。ただ、1G区のpit-4から1点出土している。中世土器・陶磁器は、ほとんどが第1・2層から出土しているが、第3層からも若干出土しており、第3層は中世期の堆積と考えられる。遺構からの出土は、土師質土器が5G区のpit-1から出土しているだけである。ここでは、中世土器・陶磁器についてみていく。中世土器・陶磁器は164点出土しているが、細片が多く図化できたのは5点にすぎない。土師質土器は82点出土しているが、大半は杯、小皿類である。1は杯底部片で、下底面には板目痕が付い



第15図 鏡(TP-21出土)(2/3)



第16図 中世陶磁器 (1/3)

ている。灰褐色を呈し、多くの石英砂と若干の赤色砂を含む。TP-22の第2層出土。2は捏鉢口縁部片である。玉縁状をなし、外面灰白色、内面淡黄色を呈する。図版8の③(以下○数字は図版8の番号とする)は、備前焼の撻鉢口縁部片である。端部を欠失している。外面はにぶい橙色、内面は灰色を呈するTP-16の第1層出土。図版8の④は天目茶碗の体部片である。赤黒色の厚い釉がかかり、にぶい黄橙色のややザックリした胎土である。貫入の方向から見るとろくろ右廻りの可能性があり、胎土も考慮すると瀬戸・美濃系と考えたほうがよい資料である。TP-9の第1層出土。国産品には、他に、瓦質土器と須恵質土器があり、瓦質土器の大半は擂鉢、須恵質土器には格子目叩きの甕もみられる。

輸入陶磁器には、青磁、白磁、青白磁、青花、陶器がある。青磁には、森田勉・横山賢次郎氏分類の碗I-1, I-2(5), I-5b(第16図4, ⑥)、明代の直口と外湾口縁の碗⑦⑧、細綱蓮弁文碗⑨、杯III-5b(第16図3)、棱花皿⑩⑪、壺瓶の把手と考えられるもの⑫がある。白磁には、碗V類?、口秀げの皿⑬⑭、高台付端反り皿⑮⑯⑰がある。青白磁は1点で碗II縁部片。青花は、小野正敏氏分類の、碗C(⑯~⑰)、碗D(第16図5, ⑲)、碗E, F、皿Cなどがある。陶器には、ガラス質の綠釉陶器があり、内面には不透明のにぶい赤褐色釉がかかる。胎土はにぶい黄橙色を呈する。龜井明徳氏の言われる華南彩釉陶であろう。TP-13の第1層出土。

滑石製石鍋

TP-21の第1層から、体部小片が2点出土している。

金属器類

TP-8のpit-1から古錢が1枚出土している。採り上げた時には?平元宝の字が判読できたが、風化のためにもろくバラバラの状態になった。①成平元宝(宋998年初鋤)、②治平元宝(宋1064年初鋤)、③端平元宝(南宋1234年初鋤)のいずれかと思われる。輸入陶磁器との関連からみると③の端平元宝の可能性が高いと考えられるが、断定はできない。不明鉄片は1G区の第1層と5G区のpit-2から出土している。鉄滓は、7957.1g出土しており、特にTP-21では1846.8g出土しており集中が認められる。他に、羽門の一部とも考えられる焼けた粘土

表3 中・近世土器陶磁器出土数量表

地区	東 國 確 認 調 立																														発掘調査	計							
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32							
層位	1G	2G	3G	4G	5G																																		
青 磁						1		1	2		1					2	3	4	4								1	1	1	1	6								
白 磁							1			1																							2						
青白磁																																		1					
青 花		1				2																											1	3	4				
陶 器							1				1		1																							3			
土師質	1			4	22	1	5	1		1	1			7	1	4		1	11	7			1		2	5		2					5	82					
瓦 質		2		2	4	2		1	4		2	1				1	4	1		1				2	5		1	2						35					
須恵質																							1			1	1							3					
近 世	3	3	8	1	15		46	30		12	12	17	1	8	8	7		3	3	29	8	3	8	12	6	1	25	12	7	11	16	2	1		318				
	21	4	0	3	11	5	39	1	59	34	1	13	16	23	1	11	17	8	4	5	7	38	24	12	9	12	7	1	31	24	7	14	24	15	1	0	0	5	482

- 27 -

表4 鉄滓出土数量表

(単位: g)

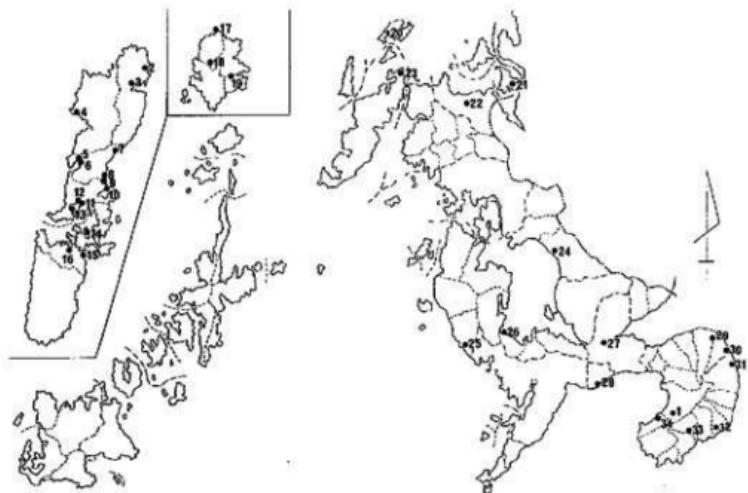
地区	東 國 確 認 調 立																																発掘調査	計				
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32						
層位	1G	2G	3G	4G	5G																																	
1 層	137.7					10.3	80.3	4.1	48.5	91.8		48.8	340.1	77.8		92.7	45.4	15.8	3.0	42.5	41.7	173.4	5.9	59.3	41.8	225.6	72.5	46.1	380.7		68.6	99.4			5379.4			
2 層			5.7	45.4	2.5	0.5										32.2		55.9		39.8	109.2	59.0													2032.4			
3 層																																			349.4			
その他の																																			195.9			
計	387.0	0	0	5.7	23.5	94.3	4.1	48.9	91.8	0	48.8	340.1	77.8	0	136.7	45.4	15.8	58.9	0	46.1	104.6	72.4	5.9	59.3	41.8	225.6	72.5	58.1	356.3	93.7	68.6	99.4	378.3	0	17.6	0	0	7937.1

塊も見られるが、形の判かるものは無い。鉄滓はTP-13とTP-23の第1層出土の2点を新日本製鉄株式会社（八幡製作所技術研究室）の大澤正己氏に分析していただいたことがあり、その結果は北有馬町の今福遺跡の報告書に掲載してある。^{註4)}

小 結

以上の遺物の様相からみると、特に輸入陶磁器の年代観から、12世紀後半～16世紀にわたる流れがとらえられるようである。工事対象区では大規模な遺構の検出はなかったが、周囲にその中心があることも考えられる。また、鉄滓が多く出土しているところから、鐵治に関係した集団の集落であったことも推測されよう。

- 註1 森田 勉・横田賛次郎「太宰府出土の輸入陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』九州歴史資料館 1978
- 2 小野正敏 「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究No.2』日本貿易陶磁研究会 1982
- 3 亀井明徳 「明代華南彩釉陶をめぐる諸問題」『三上次男博士喜寿記念論文集（陶磁器編）』1985
- 4 大澤正己 「今福遺跡における製鉄関連遺物の金属学的調査」『今福遺跡III』長崎県文化財調査報告書 第84集 1986



第17図 長崎県内・弥生・古墳時代の鏡出土地

表5 弥生時代から古墳時代の鏡出土地

番号	通路名	在地	遺物名(通路+番号)	鏡形式	文獻	時代
1	大原敷	南高木小字大原敷下牛引	2号	不明	本著	弥生・古墳
2	弓の貫	ト型鏡 上野町弓の貫毛子山背陽	鏡式石槽	万葉鏡(後鏡)	日本の中の新鮮文化20	古墳
3	朝日山	朝日山 上野町大字朝日山1003	鏡式心接	内円花文鏡	本著	古墳
4	人神墓山	上原山 佐渡町人神墓大山(草山)	鏡式右接	便	古事記と文化	古墳
5	タガヤシケ	上原町田代村田代タガヤシケ	鏡式右接	内円花文鏡・前垂鏡方	本著	古墳
6	タカマツノデン	上原町田代村田代タカマツノデン	鏡式右接	内円花文鏡・鏡式方鏡	本著	古墳
7	蛭ノ瀬	上原町田代村蛭ノ瀬	鏡式右接	内円花文鏡	青云(別冊付録)一	古墳
8	波丸	上原町田代村波丸子入	不明	鏡式右接	長崎県埋蔵文化財監視地カード	古墳
9	ニニガ純	上原町田代村ニニガ純	鏡式右接	内円花文鏡北緯	本著	弥生・古墳
10	御宿島古墳	御宿島下河内千合谷合きタシ田	鏡式心接	内円花文鏡	奈良書院486-3	古墳
11	東の浜	東の浜上原町田代モシ	鏡式右接	内円花文鏡	本著	古墳
12	ハコロ	東の浜上原町田代ハコロ	鏡式右接(少)	内円花文鏡	本著	古墳
13	佐渡酒水町	佐渡酒水町田代モサキ	鏡式右接(少)	内円花文鏡(後鏡)	青云(別冊付録)一	古墳
14	赤崎	佐渡酒水町田代モサキ(通路)-3	鏡式右接(少)	内円花文鏡	本著	古墳
15	中之瀬	下原山佐渡町中之瀬ノ段	鏡式右接	内円花文鏡	上原町田代地図	古墳
16	高森シナ	ト西原山佐渡町高森シナ	鏡式心接	内円花文鏡(後鏡)	村中の日本と文化	古墳・古墳
17	若宮寺山	佐渡町若宮寺(佐渡島)佐見	鏡式右接	内円花文鏡	長崎県埋蔵文化財監視地カード	本著
18	カラキ	佐渡町若宮寺カラキ(佐渡島)佐久保	共生生着鏡	内円花文鏡	奈良書院317-5-38-3	古墳
19	坂の辻	佐渡町若宮寺坂の辻(佐渡島)佐久保	共生生着鏡(前鏡)	内円花文鏡	本著	古墳
20	猪鼻山古墳	佐渡町若宮寺猪鼻山内円花文鏡	鏡式右接	内円花文鏡	本著	古墳
21	白七	佐渡市大字白石町白七	鏡式右接	内円花文鏡	本著	古墳
22	船の木	佐渡市大字船の木町船の木	鏡式右接	内円花文鏡	本著	古墳
23	通路	佐渡市大字通路町久保	鏡式右接(少)	内円花文鏡	平成3年発行地図	古墳
24	白石川	佐渡市白石川町白石川白石川	鏡式右接	内円花文鏡	平成3年発行地図 下空	古墳
25	志賀古墳群	佐渡市佐賀町志賀町志賀古墳群	鏡式右接	内円花文鏡	佐渡市文化財調査報告書3号1995	古墳
26	熊島古墳群・1号墳	佐渡市佐賀町熊島町熊島古墳群	鏡式大右接	内円花文鏡	長崎県埋蔵文化財監視地カード	古墳
27	通路	佐渡市大字通路町久保	鏡式右接	内円花文鏡	本著	古墳
28	下多井掛跡	佐渡市多井掛町下多井掛	鏡式右接	内円花文鏡	本著	古墳
29	金子内裏	佐渡市金子町金子内裏丁303	秦家式六石束	本著	古事記新解1995	古墳
30	高須古墳	佐渡市高須町高須丁高須古墳	鏡式右接	内円花文鏡	山形県埋蔵文化財監視地カード	古墳・古都
31	西野町	佐渡市(二会)西野町西野	秦家	小鏡	長崎県埋蔵文化財監視地カード	古墳
32	西野理石碑	佐渡市西野町西野	鏡式右接	小鏡	長崎県埋蔵文化財監視地カード	古墳
33	今瀬	佐渡市今瀬町今瀬今瀬	1号鏡	小切削鏡	今瀬地図 1995	古墳
34	日没理石碑	佐渡市日没町日没	鏡式右接	内円花文鏡(後)	長崎県埋蔵文化財監視地カード 1978	古墳

IV まとめ

大屋敷遺跡は、小浜町山畠地区の農業振興事業に関わる分布調査によって発見された。その後事業計画にあたって、遺跡の範囲を把握する必要から、確認調査を実施した。その結果、山畠834・835番地（約1,200m²）と823・824番地に中世の遺構を検出し、周辺に遺跡の拡がりがあることが考えられた。

昭和61年度事業計画で設計変更できない排水路部分についての調査依頼があり、この対応のため発掘調査を実施することとなった。

遺跡は、旧石器から中世の長い期間の生活の痕跡が認められた。

先土器時代では、ナイフ形石器の出土があり町内では諏訪池に次いで2例目の発見である。

縄文時代では、晩期の刻目突帯文土器、組織痕土器や石鏡、黒曜石剝片、凹石、スリ石等の遺物が出土し、朝日山遺跡や黒谷遺跡との対比資料が得られた。

弥生時代の出土遺物は少量であったが、北有馬町今福遺跡と同様後期の土器が出土しており、当遺跡との関連が窺える。

古墳時代では4世紀頃の土師器片が認められた。また、弥生時代後期から古墳時代にかけての鏡片（PT-21）が出土しており、県内各地の出土例からして石棺墓が存在していた可能性が考えられる。（第17図・表5）

中世では、PT-8区の柱穴から、古錢の出土があって、□平元宝（①成平元宝 ②治平元宝 ③端平元宝のいずれかであろう）の文字があり、10世紀末～13世紀にかけての年代があてられる。これによって、検出したpit群の相対年代がえられ、また出土遺物に多くの鐵やフイゴの羽口が出土していることから、製鉄関係の生産が中世期に行われていたことが予想される。

今回の調査では、試掘壕と排水路部分に限られた調査であったため、遺跡の全容を把握するまでには至らなかった。しかし、遺構遺物の包蔵状況がある程度判明し遺跡の性格をおおまかに知ることが可能になったと考えられる。

参考文献

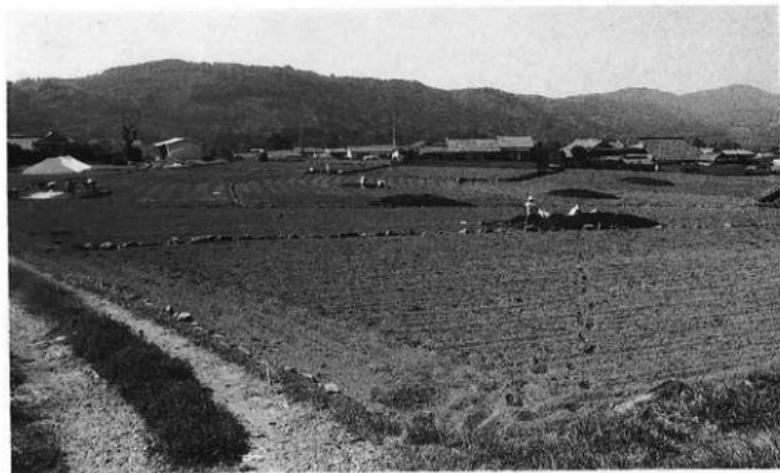
- 長崎県教育委員会「今福遺跡II」 長崎県文化財調査報告書 第77集 1985
- 岡崎 敬 編「長崎県・佐賀県・熊本県における『古鏡』発見地名表稿」
九州文化史研究紀要 第19号 九州文化史研究施設 昭和49年（1974）

図 版

圖版 1



遺跡遠景



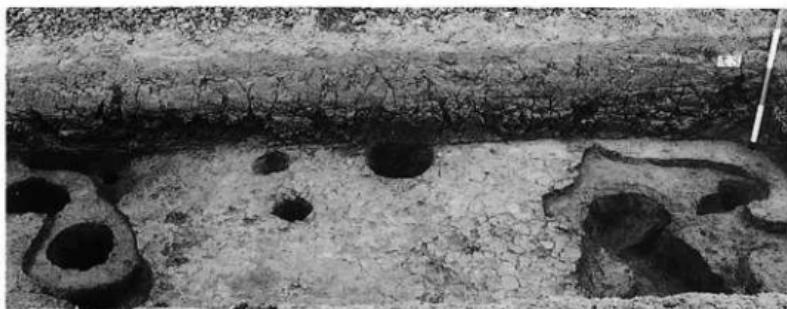
範圍確認調査

図版 2



範囲確認調査 TP-8・18区

図版 3



範囲確認調査 TP-32・8・18 区土層

圖版 4



本 調 査

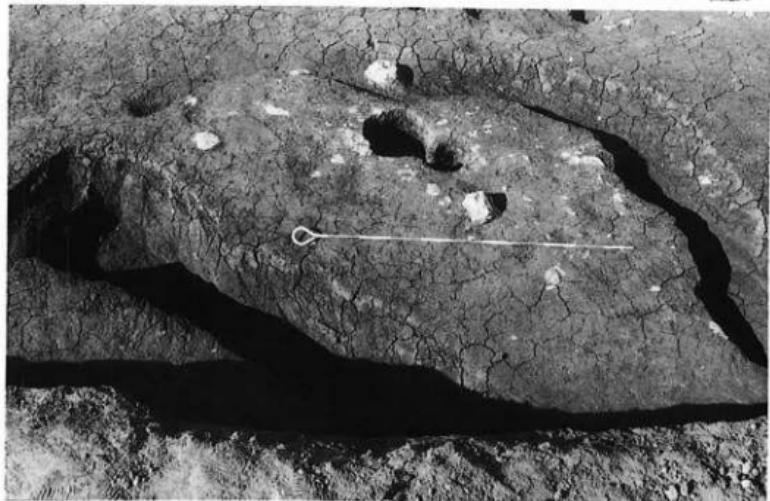


石鐵出土狀況



Pit 2 粘土塊出土狀況

図版 5

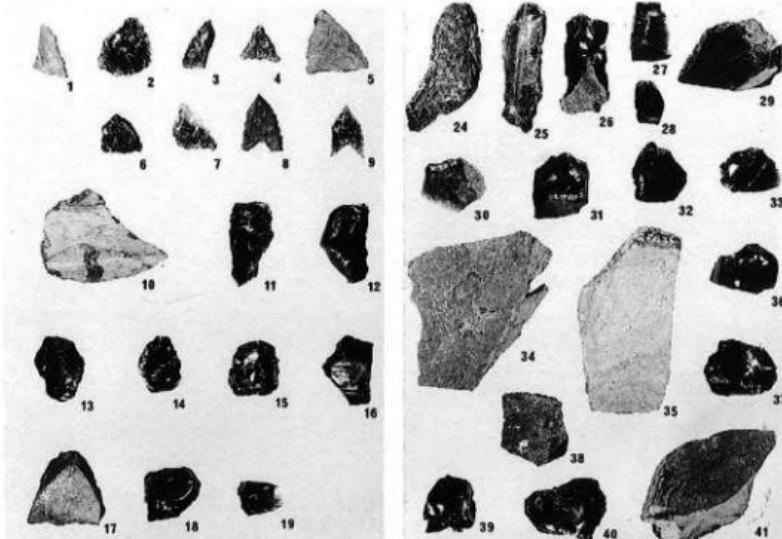


本調査ドーナツ遺構

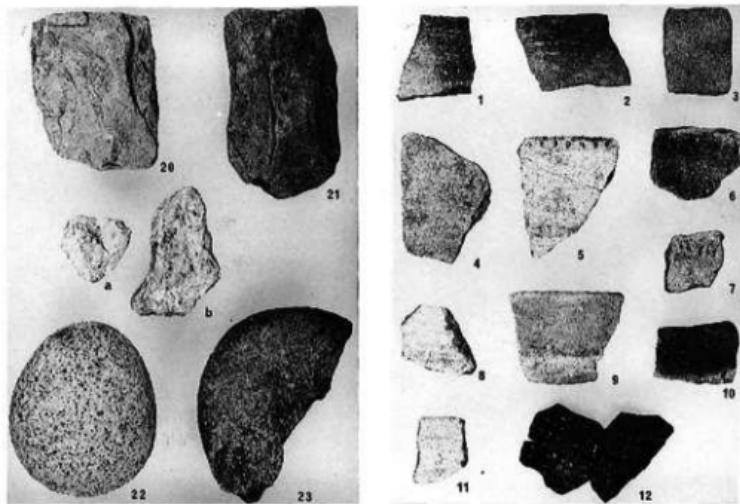


本調査Pit 検出状況

図版 6

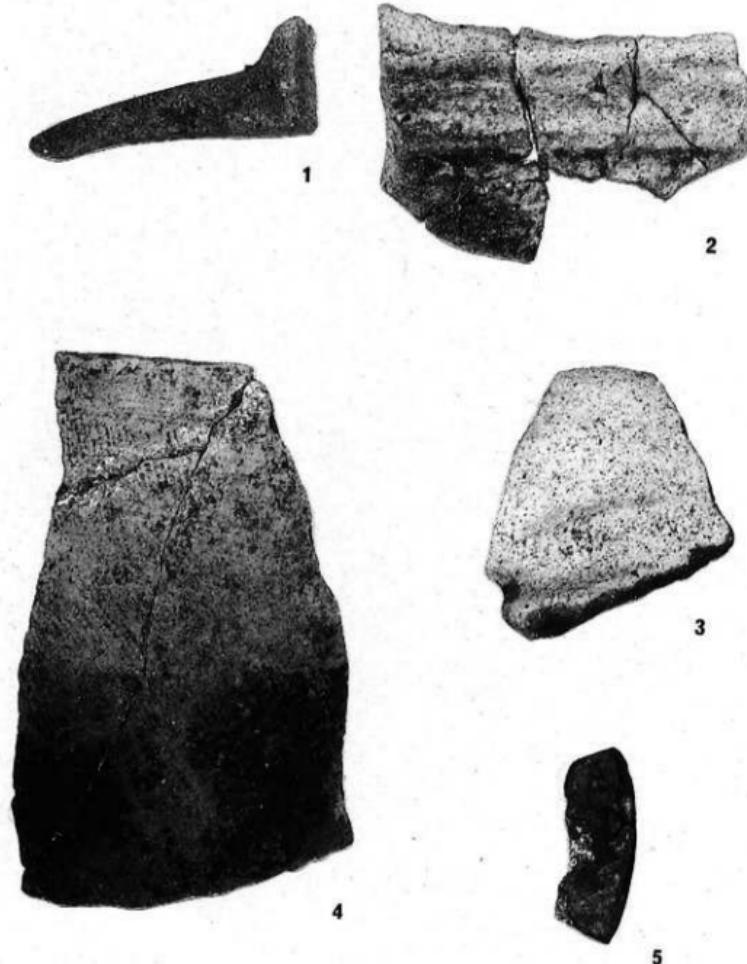


(ナイフ形石器・石鏃・スクレバー・使用痕のある剥片)(側片・石核)



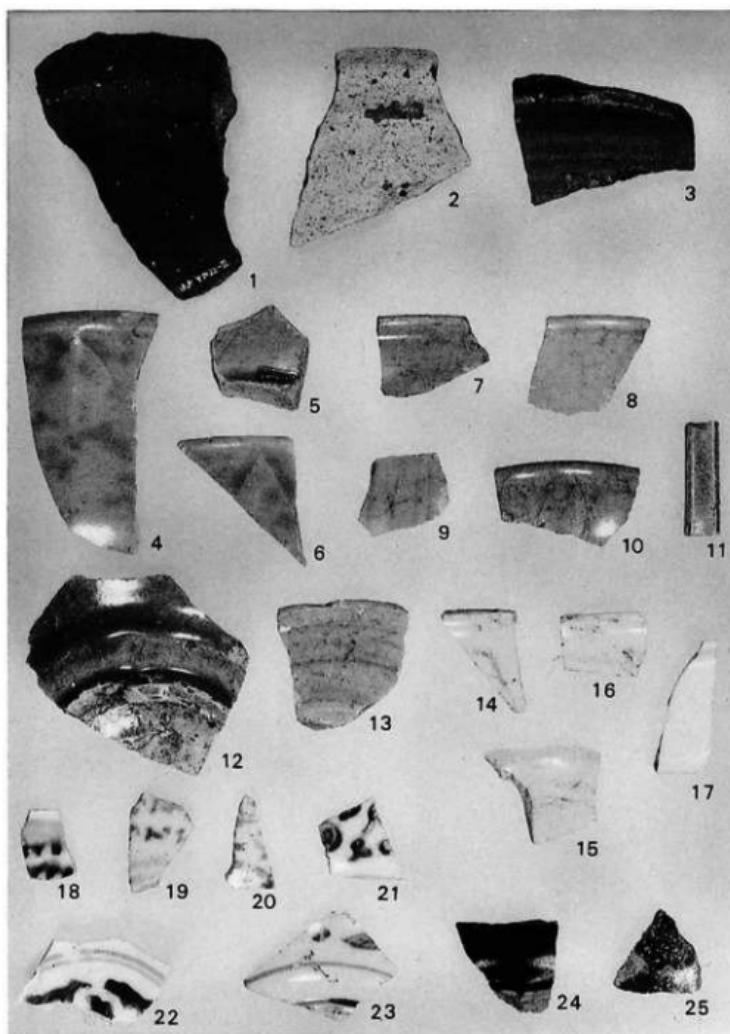
(石片abは鉈文岩片・磨石・凹石)(土器)先土器・縄文時代の遺物

図版 7



弥生・古墳時代の土器 (1/1)

図版 8



中世土器・陶磁器 (2/3)

II 三 代 遺 跡

——北松浦郡唐島町所在——



例　　言

1. 本書は、昭和58年、北松浦郡麿島町内で行なわれた三代地区水路災害復旧工事にさきだって実施した三代遺跡緊急発掘調査の報告書である。
2. 調査は麿島町教育委員会が主体となり、正林謙指導主事（現文化財調査員）・村川逸朗 文化財調査員（現文化財保護主事）が担当した。
3. 本報告の執筆及び編集は村川による。
4. 本報告の出土遺物は、現在県文化課が保管している。

本文目次

	頁
I. 調査にいたるまで.....	43
II. 麿島町の自然環境.....	44
III. 遺跡の立地と周辺の遺跡.....	45
IV. 調　　査	
1. 調査の概要.....	49
2. 土　　層.....	49
3. 出土遺物.....	50
V. ま　　と　　め.....	67

挿図目次

	頁
第1図 麿島町内の遺跡.....	46
第2図 三代遺跡周辺地形図.....	48
第3図 三代遺跡土層図.....	49
第4図 三代遺跡出土の土器①1/2.....	51
第5図 三代遺跡出土の土器②1/2.....	52
第6図 三代遺跡出土の土器③1/2.....	53
第7図 三代遺跡出土の土器④1/2.....	54
第8図 三代遺跡出土の土器⑤1/2.....	55
第9図 三代遺跡出土の土器⑥1/2.....	56
第10図 三代遺跡出土の土器⑦1/2.....	59
第11図 三代遺跡出土の石器①1/2.....	60

表目次

	頁
第1表 麿島町内の遺跡.....	47
第2表 三代遺跡出土土器観察表①.....	57
第3表 三代遺跡出土土器観察表②.....	58
第4表 三代遺跡出土石器計測表.....	66

図版目次

	頁
図版1 遺跡遺影、三代遺跡土層.....	71
図版2 遺物出土状況・調査状況.....	72
図版3 三代遺跡出土土器①1/2.....	73
図版4 三代遺跡出土土器②1/2.....	74
図版5 三代遺跡出土土器③1/2.....	75
図版6 三代遺跡出土貝輪・石器①1/2.....	76
図版7 三代遺跡出土石器②1/2.....	77
図版8 三代遺跡出土石器③1/2.....	78
図版9 三代遺跡出土の自然遺物1/2.....	79

I 調査にいたるまで

三代遺跡は、北松浦郡鷹島町中通免字広見江、通称「三代の浜」にある。現地は鷹島北西岸にあり、小規模な砂丘の奥は後背湿地となっている。同遺跡は、昭和50年発刊の鷹島町郷土誌によれば「友尻遺跡」となっているが、該当する小字名は現地一帯ではなく、通称に従って「三代」の遺跡名を呼称することに町教育委員会と協議調整した。

昭和57年度、「三代地区水路灾害復旧事業」が、同町事業として着工された。同工事は、三代海岸の水出地帯を貫流する小流の護岸工事により、河川氾濫を防止するものであったが、工事中に、遼足中の中学生が遺物を発見し、このことが新聞報道された。

鷹島町教育委員会は、関係部局と協議して、工事を一時中断させるとともに県文化課に指導を求めた。県文化課は、郷土誌に収録されている点で「周知」の遺跡であるが、全国遺跡地図には未収録である。以上の点から「公共工事にかかる遺跡発見時の規定」(文化財保護法57条6)による取扱いと、「公共工事に遺跡がかかる場合の規定」(同法57条3)による取扱いの必要を指導した。

鷹島町は、昭和58年3月27日～4月2日までの7日間、遺跡にかかる水路工事の区間3.0m×20mについて調査を実施した。

(鷹島町調査関係者) 顺序不動・敬称略

鷹島町教育委員会教育長 宮本正則（現町長）

- ♦ ♦ 事務局長 安部恭一（現総務課長）
- ♦ ♦ 社会教育主事 福田 光（現町立歴史民俗資料館館長兼務）
- ♦ ♦ ♦ 担当 木山智明（現県地方課出向）
- ♦ 経済課課長 川内久義
- ♦ ♦ 係長 山山一年（地形測量担当）
- ♦ ♦ 坂 登（現建設課）（地形測量担当）
- ♦ ♦ 麻 弘幸（　　）（地形測量担当）

II 鷹島町の自然環境

県北部の壱岐水道に面する伊万里湾口にある島で、東経129度45分、北緯33度26分の位置にある。伊万里湾は東松浦半島と北松浦半島の間の巨大なラッパ状の入り江で波静かである。この壱岐水道には平戸島をはじめ、生月島、度島、的山大島等があり、北側には海上を26km程隔てて壱岐島がある。

鷹島町の主島である鷹島は面積16.23km²、東西約5km、南北約13kmで、松浦市からは北方約9kmに位置する。標高は南部の牧ノ岳117.0m、北部の宮地岳が116.6mでほとんど変わらず、第三紀砂岩層の基盤に玄武岩の溶岩台地がのっている平坦な島である。ただ神崎免の半島一帯は河川の浸食、地すべり、海食（海岸の波の浸食）が甚だしく、上部の溶岩台地は大半流れ去り、基盤である砂岩の露出度が著しい。溶岩台地上の土壤は暗赤色の粘性に富む玄武岩の風化土壤に覆われている。この土壤は豊かで農作物によく、畑地として利用され葉煙草の栽培が盛んである。

水系としては溶岩台地より海面に向かう短い溪流しかない。しかし、入り江の条件が良い所では、三代遺跡にみるように後背湿地が発達している。また、土壤図をみると、細粒グライ土壤の所が三代を含めて8ヶ所程みられる。水田は地下水の得られる傾斜地や谷間に多く、米は不足する。海岸線は複雑な岩浜で海食崖やアリス式海岸等が多い。

気象条件は、九州型気候区のうち西海型気候区に属し、対馬暖流の影響もあり、年平均16℃、1月の平均気温6℃以上で、冬は温かく夏は涼しいといった海洋性の気候に恵まれている。鷹島町には、今宮神社のイチョウと、住吉神社のアコウという県指定の天然記念物があるが、このアコウは九州西岸における分布の北限である。

〈参考文献〉

- 1 「角川日本地名大辞典」42 長崎県 角川書店 1987年
 - 2 「鷹島町郷土誌」1975年
- 註1 a 「土地分類基本調査」平戸、長崎県 1974年
 b 「土地分類基本調査」呼子、唐津、佐賀県 1974年
- 註2 註1 aに同じ。

III 遺跡の立地と周辺の遺跡

鷹島西岸の中央部より少し南側に位置している。外海に面した遠浅の入り江になっている。現状は第2図にみるように水田となっている。地形分類図でも谷底平野となっており、土壤図では細粒グライ土壌となっている。ところで、現場での聞き取り調査によると、第2図にスクリーントーンの網かけ部分で示した干田部分は、試錆時に下が固くて下までとおらなかつたという事であり、また、この干田部分から東側の奥まった部分は、標高が3m以上のところまでトーフのように軟弱な層序（黒灰色の砂）であったという事である。このことからして、干田部を山裾とする丘山地があり、末端部は開田されたことが推測される。現在の水田部分は流水路部分より北側を狭隘な出口とする袋状の後背湿地であったと考えられる。

周辺の遺跡としては、最近距離の山の上に宝ヶ峯古墳群がある。（第1図-24～26）宝ヶ峯古墳群は三代遺跡のある三浦を望む丘の上に位置する。古墳群は3基からなり宝ヶ峯1号、2号、3号と呼んでいる。いずれも構穴式石室である。古墳群付近からは遠く岩岐を望むことができる。これらの古墳はいずれも古墳時代後期のものである。丘の中腹に小さな円形の墳丘をもち、内部は単室の横穴式の石室。須恵器の出土遺物より6世紀後半の時期に築造されたものだろう。^(註1)

町内の遺跡としては、第1表に示したように現在37ヶ所が知られている。まず、旧石器時代の遺跡では、黒島に2遺跡と鷹島に7遺跡の合計9遺跡がある。いずれの遺跡もナイフ形石器や細石器等が表採されている。次いで縄文時代になると数が増え、黒島に1遺跡、鷹島に16遺跡あり合計は17遺跡となる。弥生時代になると数は激減し、僅かに2遺跡を数えるのみである。古墳時代になると古墳時代後期の横穴式古墳が4基と、散布地等の生活遺跡等が4遺跡の合計8遺跡に増えれる。歴史時代になると、平安時代の城跡である番屋山と広久山満福寺跡の2遺跡がある。中世になると12遺跡が知られている。第1表の37の鷹島海底遺跡は、有名な文永・弘安の役（元寇）の時の遺跡であるが、他の第1表の19、対馬小太郎の墓を始めとする中世の石塔群も文永・弘安の役に関連があるものであろう。近世では、第1表の4、鷹島遠見番所跡がある。

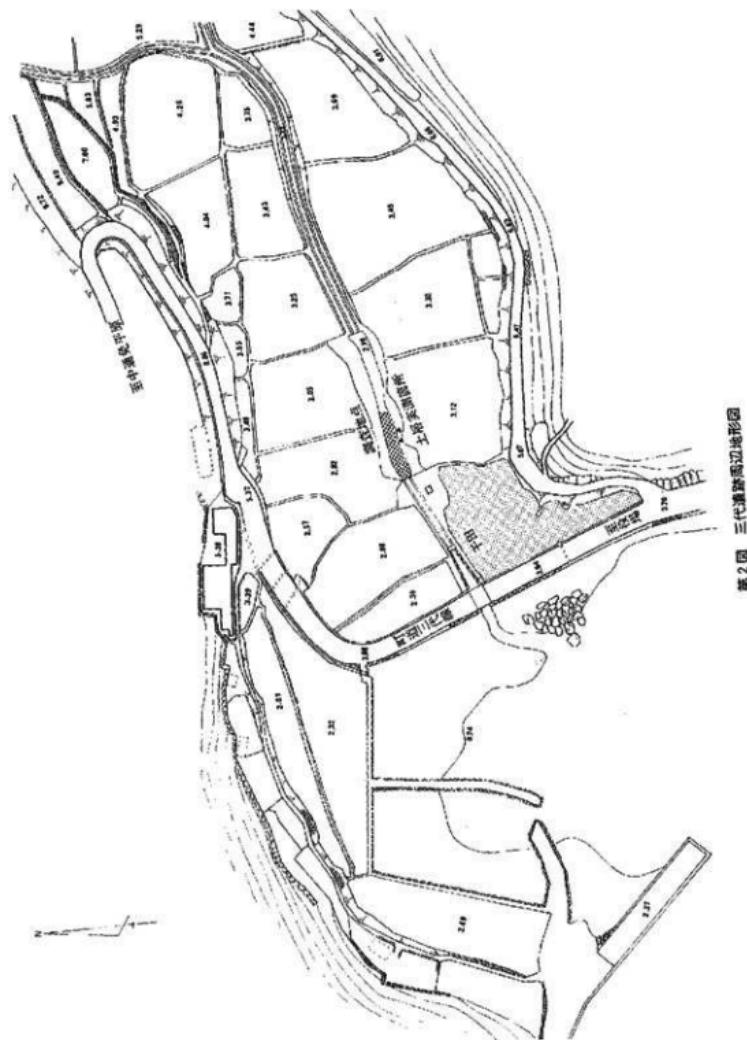
註1. 坂田邦洋『鷹島埋蔵文化財調査報告書』「鷹島町郷土誌」1975年所収



第1図 漢島町内の道路

表1 虎島町内の遺跡

番号	名称	種別	時代	所在地
1	ハゲノド遺跡	散布地	先・繩	黒島免字ハゲノド
2	二十手遺跡	*	先土器	*二十手
3	山頭遺跡	*	先・繩	阿翁浦免字山頭
4	黒島遠見番所	番所跡	近世	*遠見
5	蒸崎鬼塚古墳	古墳	古墳	*蒸崎
6	龍面塚石塔群	石塔群	中世	*波佐子763
7	速泉岩陰遺跡	岩陰	繩文	*速泉977-978
8	医王城城跡	城跡	中世	里免字山口谷
9	永光寺跡	寺跡	*	*
10	長田遺跡	散布地	繩・古	*長田
11	大宮遺跡	*	繩文	里免字大宮
12	橋坂遺跡	*	先・繩	*橋坂1072
13	長畠遺跡	*	先・繩・弥	神崎免字長畠
14	神籠遺跡	*	先・繩	*神籠2347-2348
15	後道遺跡	*	*	*後道
16	兵衛次郎の墓	中世墓・石塔群	中世	*渡瀬
17	西方寺跡	寺跡	*	*石川
18	石川石柏墓	墳墓	弥~古	*石川・川瀬氏畠地
19	対馬小太郎の墓	中世墓・石塔群	中世	里免字清水川
20	刀の元石塔群	石塔群	*	*清水川
21	秋丸岩陰遺跡	岩陰	繩・古・中	*秋丸
22	仲瀬遺跡	散布地	繩文	中道り免字仲瀬
23	三代遺跡	*	繩・古	*廣空江
24	宝ヶ峯1号古墳	古墳	古墳	*宝ヶ峯526
25	宝ヶ峯2号古墳	*	*	*宝ヶ峯523
26	宝ヶ峯3号古墳	*	*	*宝ヶ峯522
27	沖前遺跡	散布地	繩文	原免字沖前642-1
28	原野伽堂石塔群	石塔群	中世	原免字沖ノ前市作島神社
29	日本山城城跡	*	*	*黒岩(日本山)
30	古道遺跡	散布地	繩文	三里免字古道
31	吉池遺跡	*	繩・中	*吉池
32	開田遺跡	*	先・繩	船唐津免字開田
33	広久山満福寺跡	寺跡・石塔群	平安	三里免字平野今宮神社
34	平野遺跡	散布地	中世	*平野
35	小浦遺跡	*	先・繩	船唐津免字小浦平山
36	番屋山城跡	城跡	平安	三里免字番屋(番屋山)
37	魔島海底遺跡	海底遺跡	中世	床浪海底地



第2圖 三代遺跡附近地形圖

IV 調査

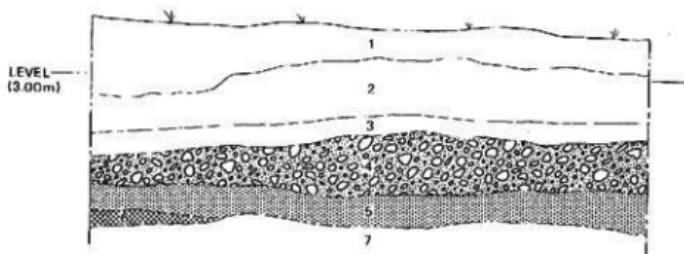
1. 調査の概要

第3図に網かけ部分で示したように、すでに護岸工事が終っている住吉神社の所から東へ、 $3\text{m} \times 20\text{m}$ の部分が発掘区である。土層の状況は、発掘地点より東側部分（今回の調査の発端となった縄文土器が出土した所）で確認していたので、4層の礫層から上は、重機により削りでもらうこととした。6層の黒褐色砂層より土器等が出土するものの、6層は東側に部分的にしか残っておらず、今回の調査区より東側の上流部分が、主たる包含層になっている可能性が強い。実際にこの発掘区の上流部分のすでに掘削が終った部分の堆土の中から土器や石器が多く採集されるという状況であった。

2. 土層

発掘区の南側の、すでに護岸工事が終っている住吉神社のところから 11m の所で幅 4m の範囲で土層図をとった（第3図）

- 1層……珪質土
- 2層……灰褐色粘質土層 (2, 3層は漸移層、細粒グライ上層)
- 3層……暗灰褐色粘質土層
- 4層……混疊青灰色砂層 (この疊層の上面に須恵器・土師器等の細片が混入している。ローリングが顕著である)
- 5層……黒灰色砂層 (本来この層が包含層と思われる)
- 6層……黒褐色砂層 (部分的に残る。有機物を含む。僅かに遺物を確認)
- 7層……黄灰白色砂層 (貝層、無遺物)



第3図 三代遺跡土層図

3. 出土遺物

今回の調査で出土、または採集した遺物は、土器865点、石器1,247点、貝輪1点、自然遺物21点である。しかし、調査地点が流水路の中であることと、既に護岸工事により東側部分の包含層が掘削されていたので、発掘資料としては、石器が5層の黒灰色砂層より190点、6層の黒褐色砂層より37点と、土器が5層の黒灰色砂層から132点の、計359点である。あとは表土および表面からの採集資料である。また鱗骨が10点と猪の牙が1点と歯が4点、猪を含む獸骨が3点、貝が3点等の自然遺物も出土した。

土器（第4～9図、図版3～5）

865点の中から53点を図示した。この53点は以下のように分類した。

- I類、阿高式系土器
- II類、北久根山式土器
- III類、鐘ヶ崎式土器
- IV類、西平式土器
- V類、粗製土器
- VI類、大石～黒川式土器
- VII類、その他の縄文土器
- VIII類、須恵器

I類の阿高式系土器としては、6と8がある。残存部が小さく、器表面も磨滅していくてわかりにくく、こまかに分類まではわかりにくい。

II類の北久根山式土器としては、12～16、29、30がある。29、30は台付浅鉢形土器であろう。

III類の鐘ヶ崎式土器としては、2、17の資料があげられる。5もそうであろう。

IV類の西平式土器としては、26、27がある。

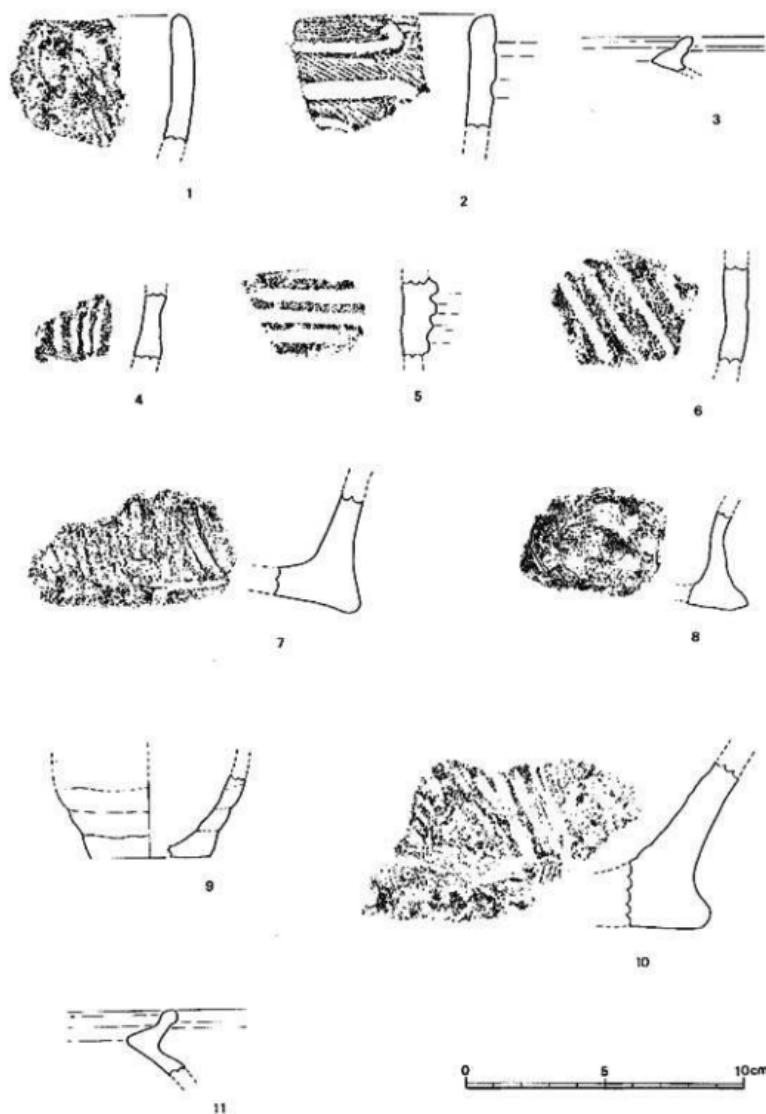
V類の粗製土器としては、10、18～25、28、50等がある。器表面の調整や、胎土の混入物もいくつかのヴァリエーションがあるので、後期のものと晩期のものとに分けられると思われるが、今回は一括して取り扱った。

VI類の大石～黒川式の土器としては、まず、浅鉢形土器として、3、11、31、32、34、36～43がある。次に、深鉢形土器としては、33があげられるのではないだろうか。

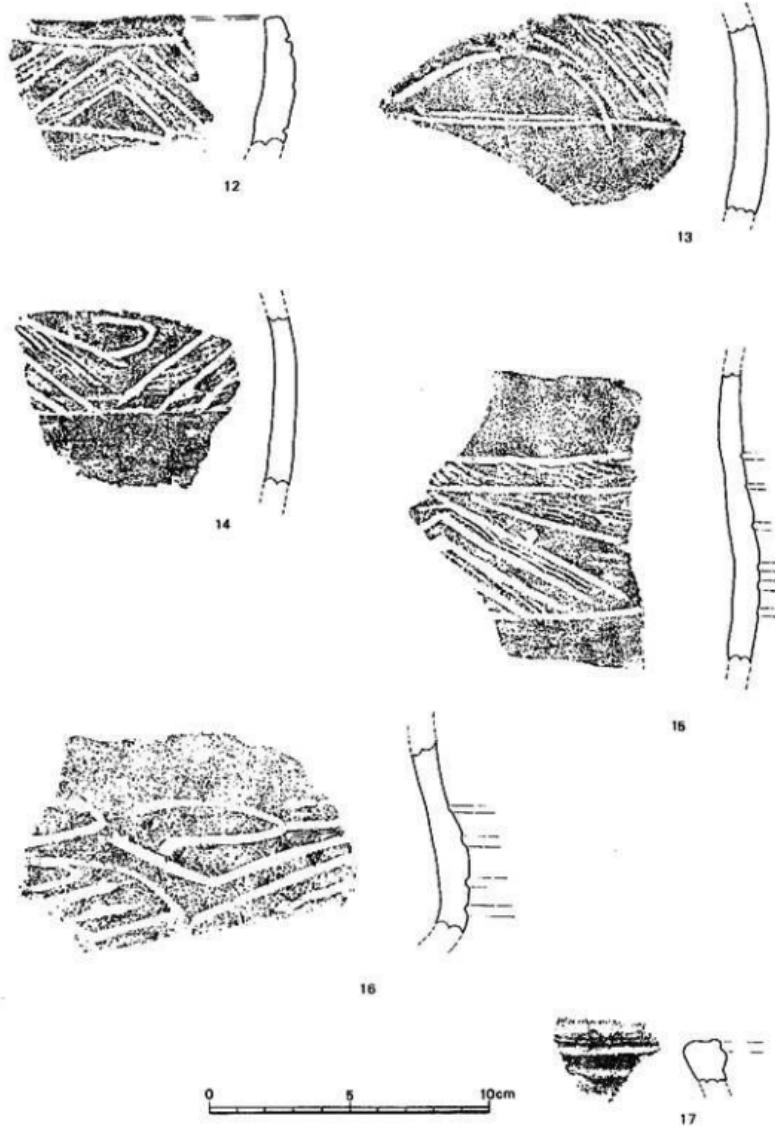
VII類のその他の縄文土器としては、4、9、44等があげられる。44は、縄文時代晩期の刻目ある穴帯文土器とも思われるが、晩期のものとしては特有の器体の屈曲がなく特定できなかつた。

VIII類の須恵器の資料としては、51～53がある。

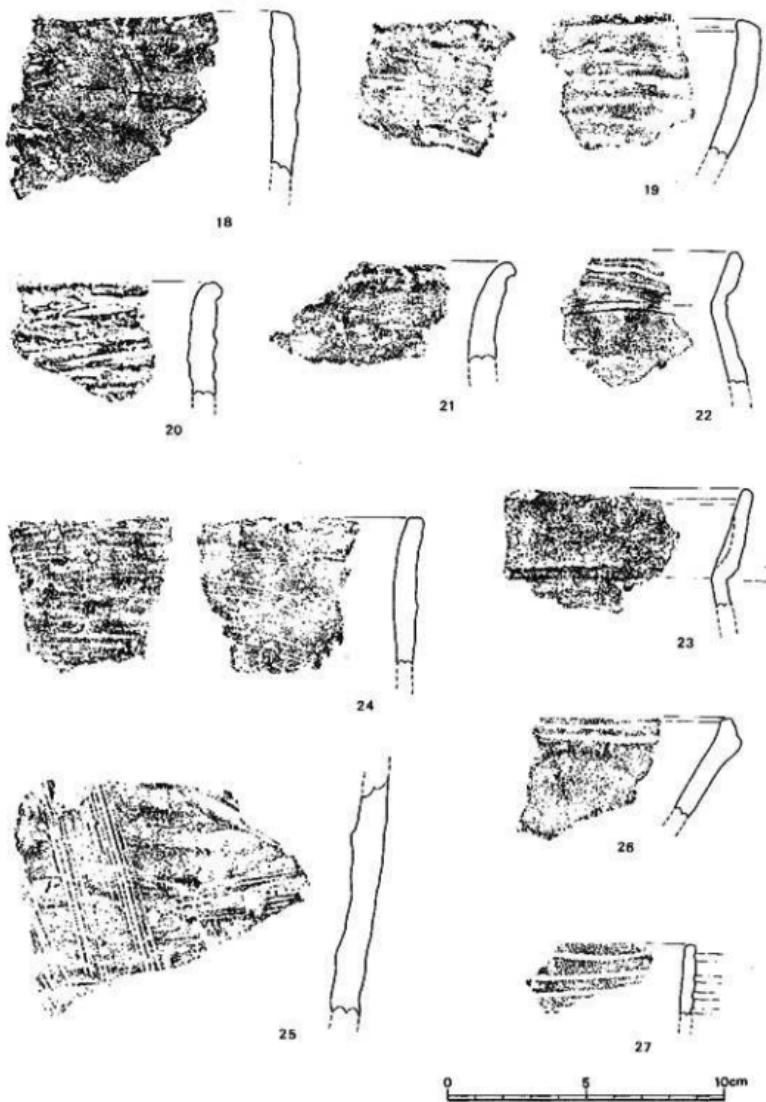
他に貝輪（第11図）がある。大半が欠損していて全体の大きさはわからないが、残存部で長さ74mm、幅14mm、厚さ5mmである。研磨痕があるので2枚貝を擦り切って作ったのだろう。



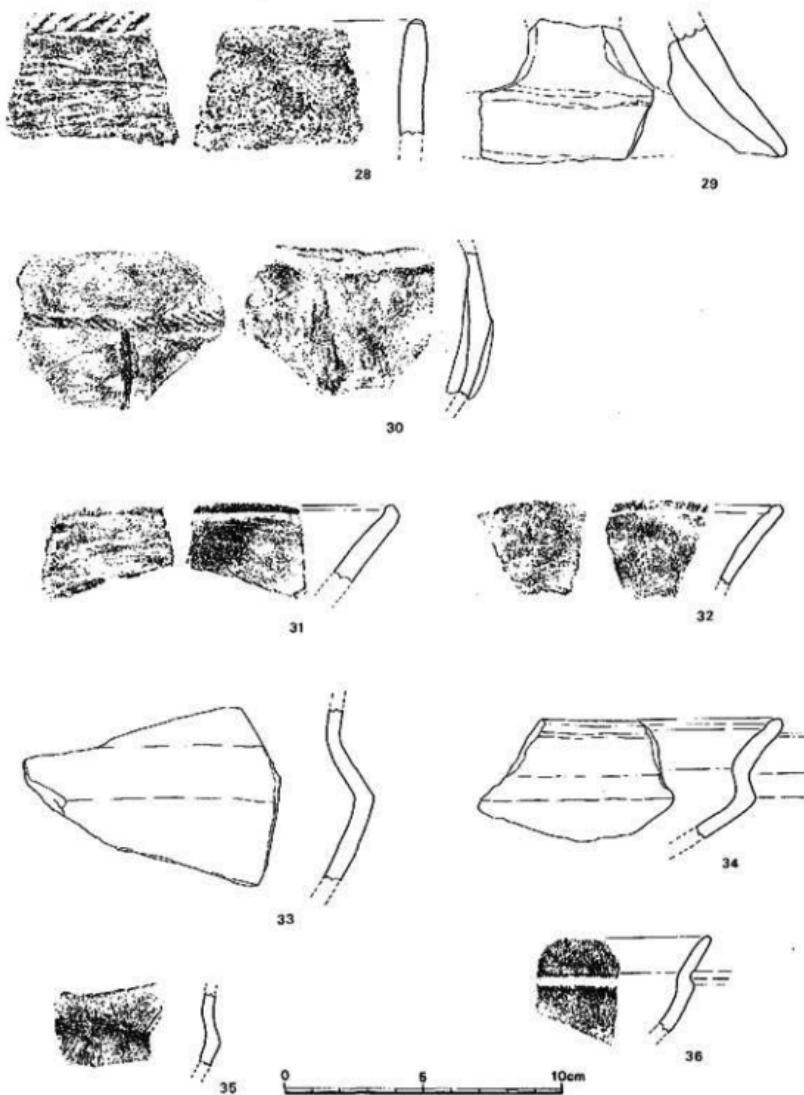
第4図 三代遺跡出土の土器①1/2



第5図 三代遺跡出土の土器②1/2



第6図 三代遺跡出土の土器③1/2



第7図 三代遺跡出土の土器④1/2



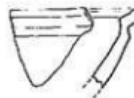
37



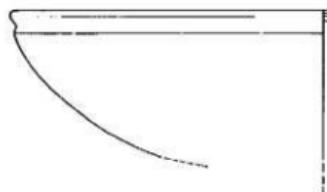
38



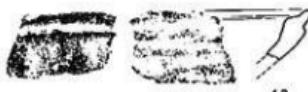
39



40



41



42



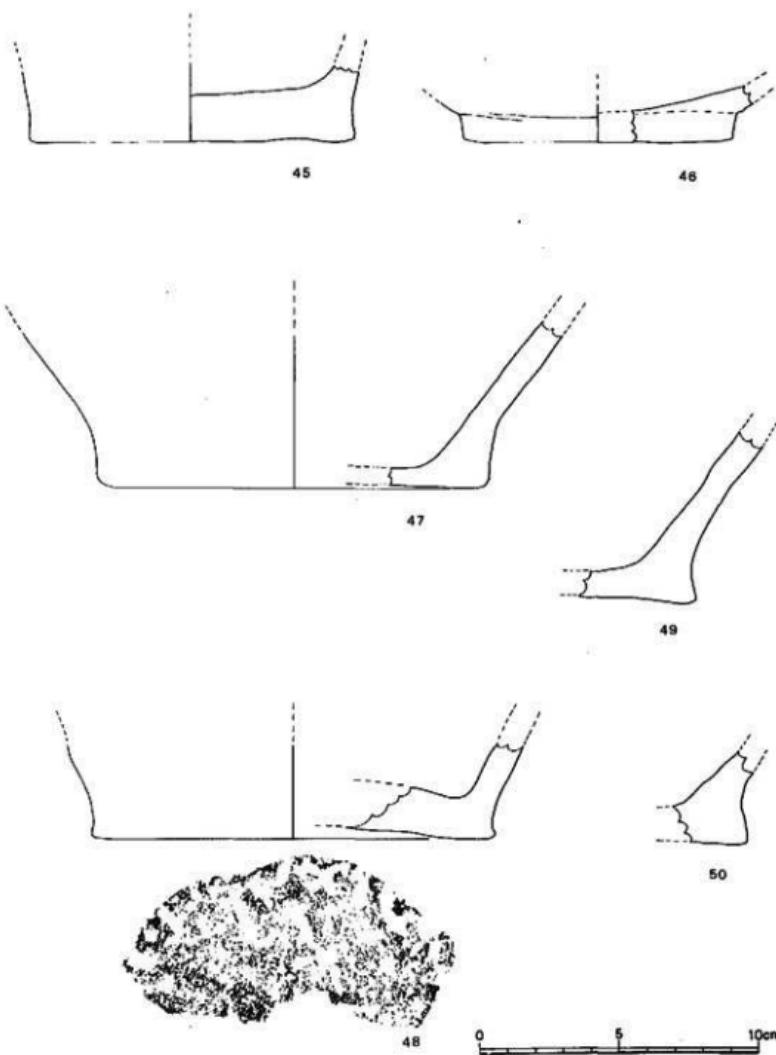
44



43



第8図 三代遺跡出土の土器①1/2



第9図 三代遺跡出土の土器⑥1/2

表2 三代遺跡出土土器観察表①

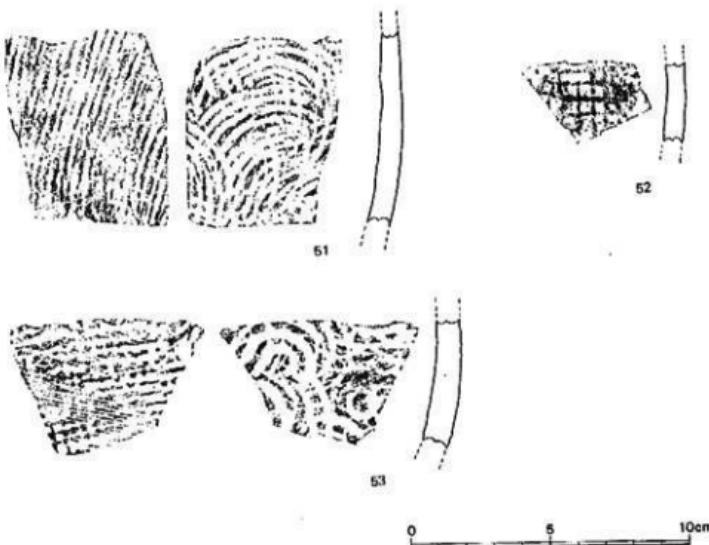
遺物番号	出土場所	部 位	胎 土	色 滅		器面調整		備 考
				外 面	内 面	外 面	内 面	
1 三S-264	口 緑	石 英 粒	灰黄褐色	灰黄褐色	←の工具によるナデ	→の工具によるナデ		
2 三S-276	×	石英粒、角七 ン石	灰 黄 色	暗灰黃色	ナ デ	→の工具によるナデ	間縫の間に模文を施す	
3 三S-351	×	×	黄 褐 色	灰黄褐色	ナ デ	ナ デ	外縁に沈縫あり	
4 三S-400	胴 部	石 英 粒	淡茶褐色	淡茶褐色	ナ デ	ナ デ	縱方向に数条の沈縫あり	
5 三S-374	×	石英粒、角七 ン石	暗茶褐色	暗茶褐色	ナ デ	ナ デ	横方向に数条の沈縫あり	
6 三S-263	×	滑 石 粒	暗赤褐色	暗灰褐色	磨滅してい て不明	磨滅してい て不明	斜行する太形圓文あり。	
7 三S-372	底 部	石英粒、長石、黑 曜石微小粒	灰黄褐色	灰黄褐色	↑の工具に よるナデ	→方向のT. 具によるナデ	底部の端がやせり出す。底 部中央はややく。	
8 三S-274	×	滑 石 粒	暗赤褐色	黑 灰 色	やや磨滅 ↑のナデによ るものと有	→の工具 によるナデ	底部の端がせり出す。	
9 三S-296	×	混 入 物 な し	暗赤褐色	暗赤褐色	ナ デ	ナ デ	粘土の軽投の跡が明瞭。胎土 焼成とも悪い。	
10 三H-1435	×	×	灰黄褐色	灰黄褐色	↖の工具 によるナデ	↗の工具 によるナデ	多孔質の焼きあがりとなって いる。粗雑	
11 三O-314	口 緑	石 英 粒	淡灰褐色	淡灰黑色	→の研磨	→の研磨		
12 三H-416	×	石英粒、角七 ン石	黑 灰 色	灰 黑 色	ナ デ	→ 工具に よるナデ	山形を沈縫で区画した中を、 削文で文様をついている。	
13 三H-251	胴 部	石英粒、長石、 角セメント	暗 灰 色	黑 灰 色	→ ナデ	雜なナデ	おそらく沈縫で山形文を彫刻 したのであらうが失くなっている。 底に模文	
14 三H-1347	×	石英粒、角七 ン石	暗 灰 色	暗 灰 色	ナ デ	ナ デ	直線的な山形の中に曲線的な 文様を沈縫で施す擬山陰文	
15 三H-419	×	×	暗 灰 色	灰 灰 色	ナ デ	ナ デ	山形文様。刻文文様	
16 三H-1942	×	石 英 粒	暗 灰 色	灰 灰 色	→ ナデ	→ ナデ	やや曲線的文様 やや網目ふくらむ。	
17 三H-423	口 緑	混 入 物 少 し	灰 黑 色	灰 黑 色	ナ デ	ナ デ	口線上端部に回線その下端外 側に沈縫有。	
18 三H-218	×	×	黑 色(媒)	灰 黑 色	→ ナデ	→ ナデ	ややふくらみながら立ち上がる	
19 三H-1493	×	×	灰 黄 色	灰 黄 色	→ の工具 によるナデ	→ の工具 によるナデ	上端部が内側に折れ上がる。	
20 三H-665	×	混 入 物 な し	灰 黄 色	灰 黄 色	→ の貝殻	→ の貝殻	多 孔 質	
21 三H-240	×	×	灰橙褐色	灰橙褐色	→ の工具 によるナデ	→ のナデ	上端以下外側を工具で押え るために上端が外に押し出され ている。	
22 三H-1914	×	×	灰橙褐色	灰 橙 色	ナ デ	ナ デ	「く」の字にわれる。口緑唇が やや肥厚している。	
23 三H	×	×	黑 灰 色	黑 灰 色	ナ デ	ナ デ	「く」の字にわれる。口緑唇が やや肥厚している。多孔質	
24 三H-664	×	×	淡灰褐色	淡灰褐色	→ の貝殻	→ の貝殻	やや外反しながら立ちあがる	
25 三H-509	胴 部	混 入 物 な し	淡灰黑色	暗 灰 色	↓の貝殻	↓の貝殻	多 孔 質	

二S;黒褐色砂層、三O;表土層、三H;表面詳集

表3 三代遺跡出土土器観察表②

遺物 番号	出土層位	部位	胎上	色調		器面調整		備考
				外面	内面	外面	内面	
26	三H-421	口 横	石英粒・角七 ン石	暗灰黄色	暗灰黄色	ナデ	ナデ	斜行する口縁上端に2条の沈線あり。
27	三H-743	*	混入物なし	暗棕褐色	暗棕褐色	ナデ	ナデ	外底に横走する4条の沈線あり。
28	三H-203	*	石 英 粒	暗灰色	灰黄色	→の貝殻によるナデ	ナデ	口縁上端にへらによる割みを連続して斜めに入れる。
29	三H-234	脚 部	貝殻粉末・角 七シ石	暗灰色	暗灰色	ナデ	ナデ	すかし入りの脚部
30	三H-285	脚 部	貝殻粉末	暗灰色	暗灰色	ナデ	ナデ	「く」の字に彎曲する。その 「く」の字の背の部分に隠似 模文、旋方向の組合。
31	三H-765	口 横	混入物なし	灰黑色	暗灰黄色	→ 研磨	ナデ	口縁上端内側に凹痕が入る。
32	三H-1895	*	*	黑灰色	黑灰色	→ 研磨	→ 研磨	口縁上端内側に沈線が1条入 る。
33	三H-246	脚 部	微 小 砂 粒	灰 黄 色	灰 黄 色	→ ナデ	→ ナデ	脚部が「く」の字にはり出す。
34	三H-1384	口 横	砂 粒 少々	淡黑灰色	淡黑灰色	→ 研磨	→ ナデ	脚部が「く」の字にはり出す。
35	三H-827	脚 部	極小砂粒少々	黑 灰 色	灰 棕 色	研 磨?	ナデ?	磨滅している。 「く」の字にはり出す脚部。
36	三H-1961	口 横	混入物ほとん どなし	淡黑灰色	淡黑灰色	→ 研磨	→ ナデ	磨滅している。
37	三H-424	*	混入物なし	灰 黑 色	黑 灰 色	→ 研磨	→ 研磨	焼成や良質。 口縁上端に微小な沈線。
38	三H-286	*	混入物ほとん どなし	暗 灰 色	暗 灰 色			磨滅していく傾向。 痕わからず。
39	三H-427 428	*	混入物なし	灰 黄 色	黑 灰 色	→ 研磨		器號が焼けている。
40	三H-422	*	*	淡黑灰色	淡黑灰色	→ 研磨	→ 研磨	焼成良。
41	三H-232	*	*	黑 色	黑 色	→ 研磨	→ 研磨	復原口径223mm。
42	三H-636	*	*	淡黑灰色	淡黑灰色	→ 研磨	→ 研磨	肩部が肥厚している。
43	三H-1976	*	石英粒数個	灰 黄 色	黑 色	→ 研磨	→ 研磨	リボン状突起があり小孔があ いている。
44	三H-700	脚 部	混入物なし	淡灰黑色	淡灰黑色	→ ナデ	→ ナデ	粘土紐を貼りつけ目を施す。
45	三H-600	底 部	貝殻	淡黄褐色	淡黄褐色	→ 只縫に よるナデ	→ 日縫に よるナデ	平底。底部径116mm。
46	三H-204	*	混入物なし	黄白色	暗灰黄色	→ ナデ	ナデ	円錐状の底部。 復原底径96mm。
47	三H-1944	*	石英粒・角七 ン石	暗灰褐色	黑 棕 色	工具による ナデ	ナデ	復原底径140mm。
48	三H-285	*	石英粒数個	暗棕褐色	暗灰黄色	→ ナデ	→ ナデ	復原底径144mm。
49	三H-252	*	石英粒・雪母	灰 棕 色	暗棕褐色	ナデ	ナデ	
50	三H-1230	*	貝殻	灰黄褐色	暗灰黄色	→ 只縫に よるナデ	→ 只縫に よるナデ	多孔質
遺物 番号	出土層位	種類	胎 土	断面の色	燒 成			備 考
51	三H-850	須恵器	良 好	灰 色	良 好			
52	三H-860	*	*	青 灰 色	*			
53	三H-861	*	*	灰 色	*			表面に叩き目あり。

三S:黒褐色砂粒、三O:表土層、三H:表面採集



第10図 三代遺跡出土の土器⑦1/2

石器（第11～15図、図版6～8）

石器は、1,247点のうち40点を図示している。40点の内訳としては、石鎌、石鋸、石錐、ピエス・エスキュー、スクレーパー、打製石斧、礫器、砥石、使用痕ある剥片、砥石、不明石器、剥片、石核等がある。

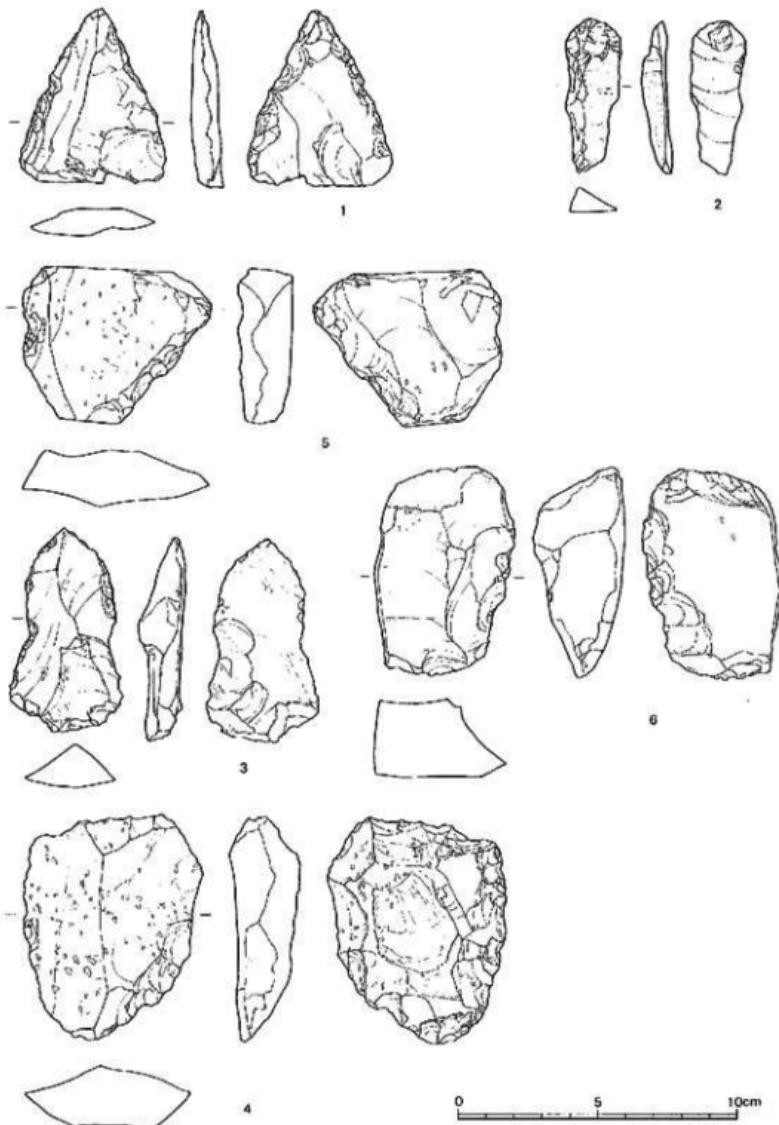
石鎌としては、8、38がある。8の資料は、もしかすると製作途中のものかもしれないが、石鎌の抉り込みがなく下端がふくらむ形のものである。8、38とも剥片鎌である。他に打製の石鎌もある（図版8）。

石鋸としては、39、40がある。発掘資料ではないが、出土した縄文土器のいずれかに伴うものだろう。

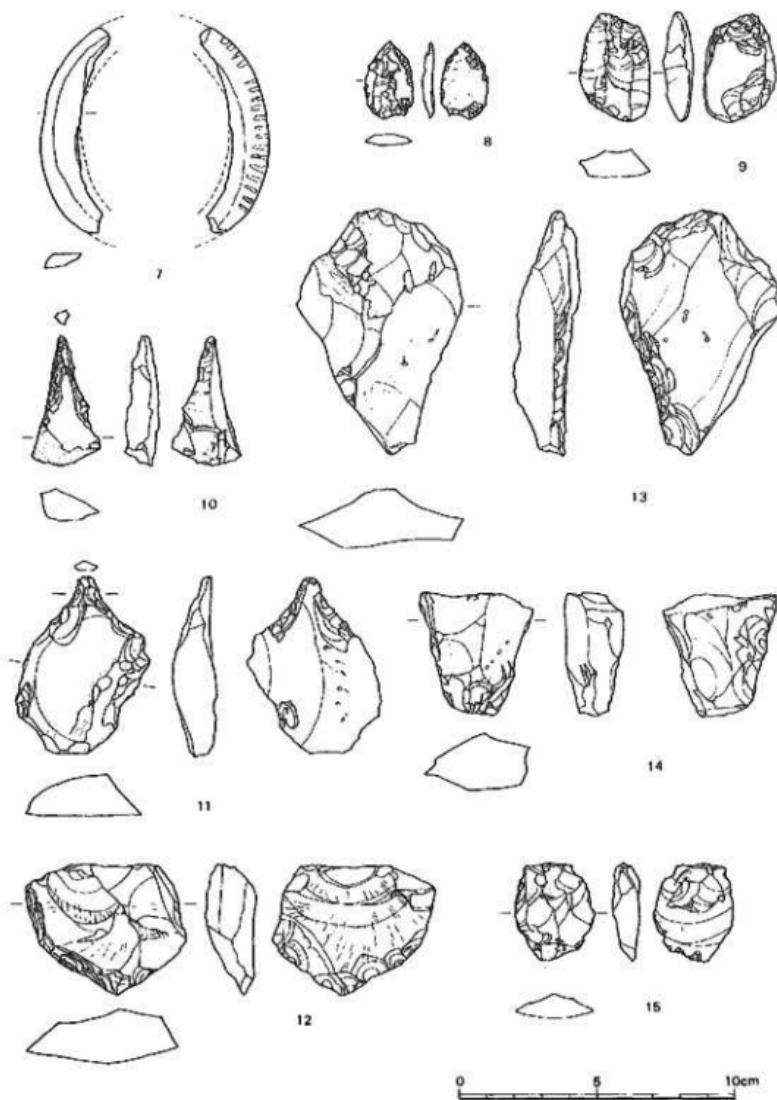
石錐は、10、11である。10の方は簡単な作りであるが、11の資料は、素材もやや厚手の横長剥片を用いて丁寧な作りである。

ピエス・エスキューは、9の資料である。鋭いエッヂを上下両端に残している。

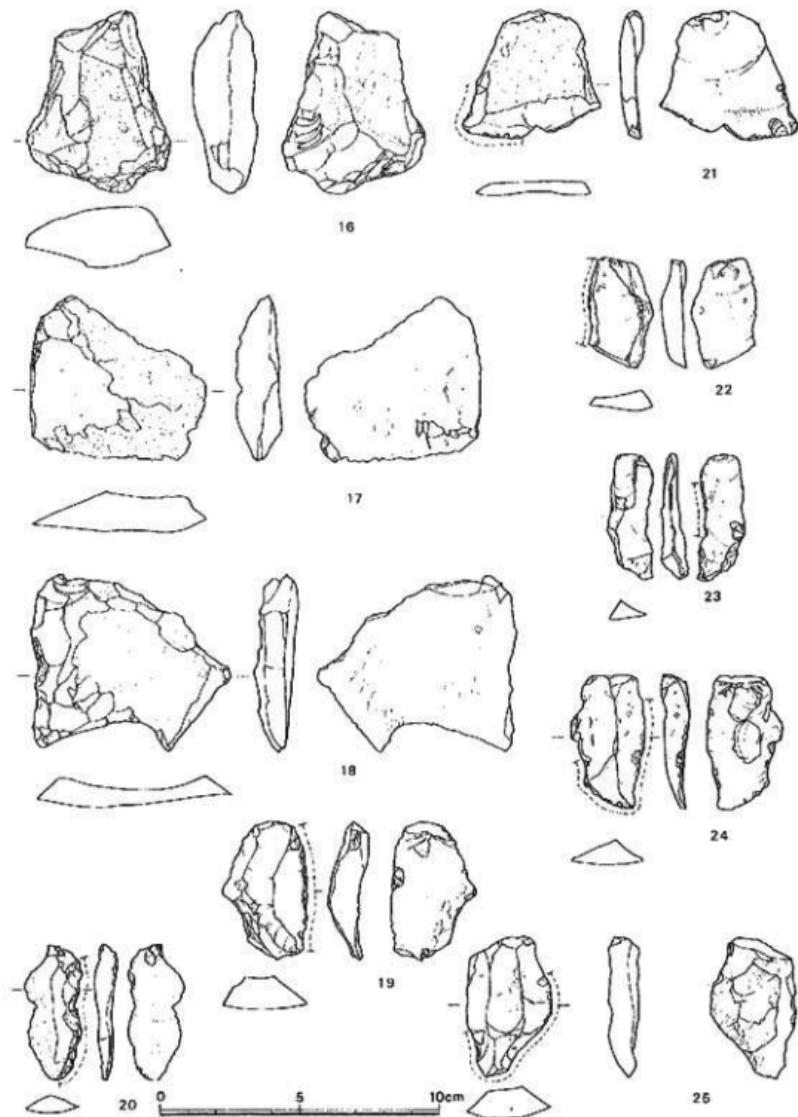
スクレーパーとしては、1、3～6、12、13、15、17、18、26、27、と12点の資料がある。1と3の資料は、いずれも先が尖るように調整が施されており、石鋸として使用された可能性がある。



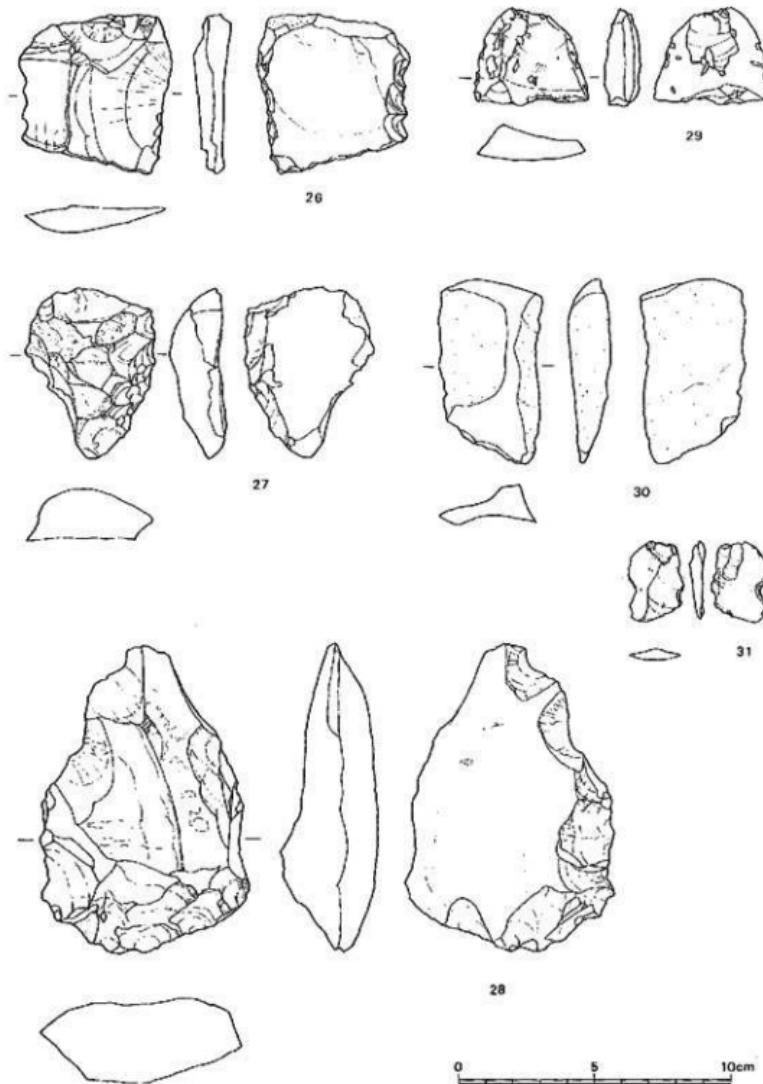
第11図 三代遺跡出土の石器①1/2



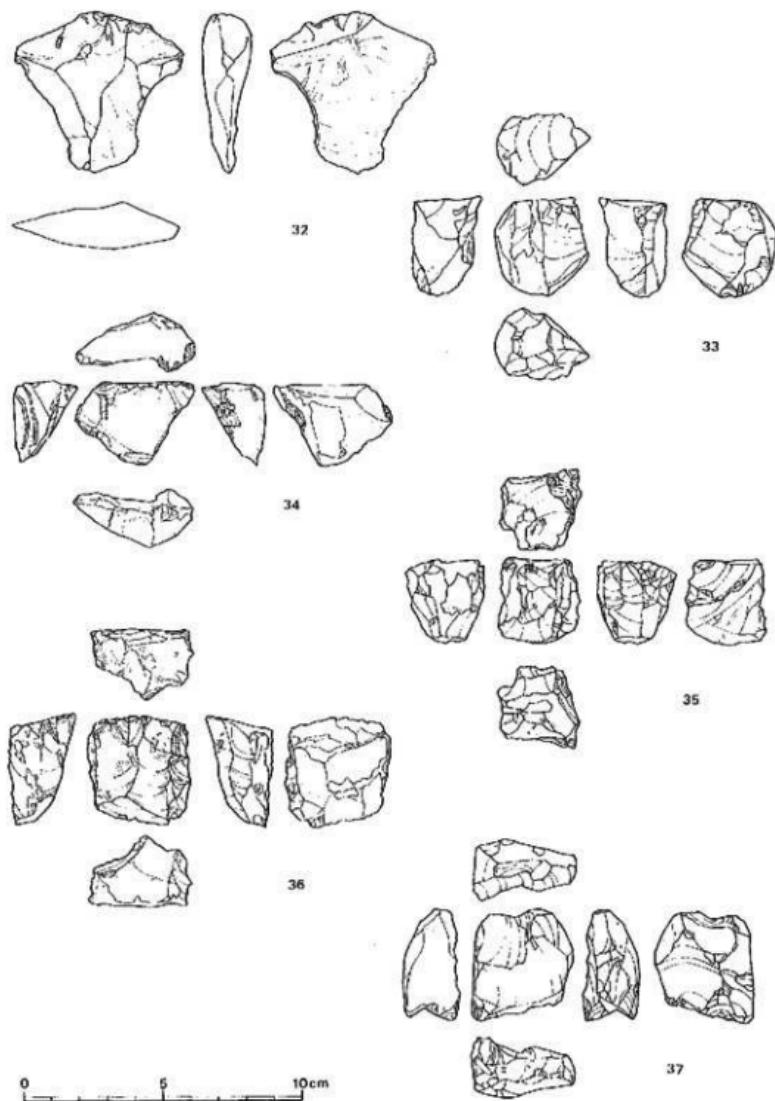
第12図 三代遺跡出土の貝輪と石器②1/2



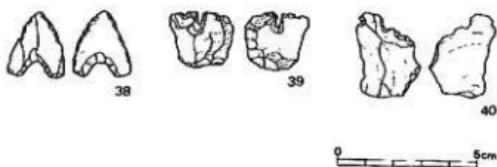
第13図 三代遺跡出土の石器③1/2



第14図 三代遺跡出土の石器④1/2



第15図 三代遺跡出土の石器⑤1/2



第16図 三代遺跡出土の石器⑥1/2

打製石斧としては、28をあげた。表裏両面の上の方に図上で斜線で示したところに擦痕がみられる。

礫器は（岡版8）の資料がある。

30は砾石である。

不明石器としては、14、16があるが、この両資料も、石錘的な使われ方が推測される。

剝片としては、2、29、31等がある。いずれも、剝片としては確に剥取されたもののようにある。これは使用痕ある剝片も含めて同じ事がいえる。

石核では、上設打面の石核33、34、36、37と、打面を転移する石核35がある。これらの石核のネガティブな剥離面をみると、大きさ的に、先に述べた使用痕ある剝片や剝片と同じ大きさであり、おそらく、これらの石核から剥取されたものだろう。

なお、使用している黒曜石は、残存する原礫面の観察では角礫状のものを使用しており、ほとんどのものが伊万里市の中岳産のものを使用している。しかし、中には白い不純物が混入する質の悪い黒曜石もある。

表4 三代遺跡出土石器計測表

()は現存値

排列 番号	出土層位	器種	石材	重さ (g)	大きさ(cm)			備考
					長さ	幅	厚さ	
1	三S-249	スクレーパー	安山岩	26.5	63	53	13	石鉈の可能性あり。
2	三S-19	剝片	黒色ob	7.3	55	21	12	背面に自然面あり。
3	三S-170	スクレーパー	安山岩	32.7	72	41	17	左右両側縁に細かな調整あり。石鉈の可能性。
4	三S-260	*	*	102.0	80	65	26	背面両面から調整を施すが腹面からの調整が丁寧。
5	三O-172	*	*	82.2	55	68	20	背面両面から調整を施す。
6	三O-194	*	*	103.0	76	50	33	背面両面から調整を施す。
8	三H-1681	石鏃	黒色ob	1.3	28	17	5	剝片鏃、抉りがない。
9	三H-2181	ピエス・エスキュー	*	9.8	39	26	11	典型的なピエス・エスキュー。
10	三H-547	石鏃	安山岩	9.5	46	24	12	尖の丸がった剝片内に調整を施して石鉈としている。
11	三H-548	*	*	39.1	65	45	16	削長削片を素材とする。鋸歯の先端部はやや磨耗している。
12	三H-1168	スクレーパー	*	48.3	47	59	19	背面両面から調整を施す。
13	三II-976	*	*	82.0	89	60	24	腹面からのみ調整を施す。
14	三H-1185	不明石器	*	(34.9)	(44)	(42)	(22)	調整のしかたが石鉈の基部のようである。
15	三H-519	スクレーパー	黒色ob	7.7	35	30	11	背面左側縁の下側にスクレーパーエッジを作出している。
16	三H-545	不明石器	安山岩	(71.6)	(65)	(52)	(24)	14の資料に似ている。
17	三H-1695	スクレーパー	*	53.6	59	63	17	背面左側縁の上の方にスクレーパーエッジを作出している。
18	三H-2208	*	*	44.8	62	72	16	背面左側縁にスクレーパーエッジを作出している。
19	三H-967	使用痕ある剝片	黒色ob	15.6	49	31	16	背面右側縁と腹面の左側縁の一部に使用痕がついている。
20	三H-912	*	*	4.6	48	22	9	背面右側縁に使用痕がある。
21	三H-2036	*	*	10.9	45	49	9	面上に波線で示した位置に背面両面に使用痕がついている。
22	三H-2178	*	*	5.3	39	24	11	背面左側縁に微細な使用痕がついている。
23	三H-525	*	*	3.9	45	17	10	腹面の左側縁に使用痕がついている。
24	三H-2043	*	*	7.7	47	27	11	背面の左側縁から左側縁にかけて使用痕がみられる。
25	三H-884	*	安山岩	16.2	51	30	12	背面の右側縁から左側縁にかけて使用痕がみられる。下端の先端部が磨耗している。
26	三H-2207	スクレーパー	*	38.4	58	57	16	腹面の右側縁にスクレーパーエッジを作出している。
27	三H-1182	*	*	53.2	62	48	21	背面右側縁に背面両面からスクレーパーエッジを作出している。
28	三H-554	打製石斧	*	300.0	113	77	36	背面両面の上の方に同じく背面で示したところに横槽がみられる。柄に錐形の突起がある。
29	三H-2029	剝片	黒色ob	14.6	36	42	14	削削している。黒鐵石の中に白い不純物がみられる。
30	三H-211	研石	砂岩	35.6	68	39	16	破損品。
31	三H-2095	剝片	黒色ob	1.9	30	20	6	使用痕ある剝片かもしれない。
32	三H-975	使用痕ある剝片	安山岩	37.3	57	60	17	背面左側縁に極めて細かな使用痕がある。
33	三H-971	石核	黒色ob	26.2	35	33	25	上段打面の石核。
34	三H-1683	*	*	15.9	42	29	21	*
35	三H-951	*	*	25.2	30	29	29	打面を転移している。
36	三H-973	*	*	30.5	39	36	23	上段打面の石核。打面は自然面。
37	三H-2160	*	*	27.4	40	36	21	*
38	三H-	剝片	鏃	*	23	20		比較的整った形をしている。
39	三H-	石	鏃	*	20	23		削削加工を施すが、深い削削加工の間に浅い溝状加工がある。
40	三H-	*	*	*	30	23		削削加工としては非常に精巧をつくりである。

三S:黒褐色砂層、三O:表土層、三H:表面採集

V まとめ

三代遺跡の時期としては、上器の項でも述べたように、Ⅰ類の阿高式系土器～Ⅶ類の大石～黒川式土器、そして、器類の須恵器がある。まず、Ⅰ類の阿高式系の土器は、縄文時代中期の後半から終末、もしくは後期の始め頃のものであろう。その後、Ⅱ類の北久根山式、Ⅲ類の鐘ヶ崎式、Ⅳ類の西平式とあるところから、縄文時代後期の前半と後半の資料がある。そして晩期になると、Ⅵ類とした大石、黒川式の土器がある。これは賀川光夫氏編牛の縄文晩期Ⅰ、Ⅱ式にあたり、縄文時代晩期前半の前葉～中葉になる。

遺跡の主体としては、Ⅰ類の阿高式系土器は2点とその数が少なく、縄文時代の後期から同晩期の前半の中葉までであったといえる。また、出土した石器もこの時期のものであろう。

石鐵や、銛先として使用されたといわれている石劍、そして、石銛として使われたかもしれない石器があることと、鯨骨や猪の骨等の自然遺物の出土と考え合わせて、海で鯨をとったり、山で猪を狩猟したりして暮らした三代遺跡の縄文人達の姿も想像されるところである。

また、4層上面から土師器や須恵器が出土した事は、古墳時代もこの三代遺跡が何らかの形で関係したものであろう。遺物が磨滅している為に、直接的にこの場所が古墳時代の生活の跡とは思えないが、南側山手中腹に宝ヶ峯古墳群が存在するところから、この三代遺跡周辺の谷底平野が、宝ヶ峯古墳群の被葬者の生産基盤であった可能性もある。

鷹島町の遺跡数の時代別の変化についてふれてみたい。Ⅲ 鷹島町内の遺跡のところでも述べたように鷹島町内の遺跡は、旧石器時代9、縄文時代17、弥生時代2、古墳時代8、平安時代2、中世12となる。もちろんこれは現在わかっている遺跡数であり、これから数が変わる事は予想されるが、一応の傾向は示しているものと思われる。この遺跡数の増減をみて気付くのは、①、旧石器時代から縄文時代への順調な遺跡数の増加。②、弥生時代の遺跡数の激減。③、古墳時代後期の古墳の出現。④、鷹島海底遺跡を始めとする中世の遺跡の存在ということになるだろう。

①と②の説明としては、鷹島の濱岩台地は地質的にも北松一帯から佐賀県の上場台地と一連のものであり、また、海水面が現在より下降していく、県北部の本土とも地続きであったといわれるところから、県北・平戸島一帯の旧石器時代遺跡と同じで狩猟・採集の生活に向いていたものであろう。縄文時代になって海水面が上昇し、島となっても回りが海であることが、かえって漁撈には適していて縄文時代の遺跡数の増加となったのかもしれない。ところが、稲作の文化である弥生時代では、沖積地に恵まれない為に弥生文化は発達しなかったものであろう。

ところが、③の古墳時代後期の古墳の出現は、①や②の説明のようにはすんなりといかない。というのは、北松から佐世保を含む県北の本土部では、前期の古墳は田平町の笠松神社古墳等があり、後期の横穴式では、松浦市の小鳴古墳がある位で、非常にその数が少ない。ところが

鷹島には4基の横穴式古墳がある。そして、この横穴式古墳は、福島に2基、度島7基、生月に2基、的山大島に4基、平戸島北部に2基あり、この鷹島を含めるとこの付近の島嶼部には実に21基の横穴式古墳が存在するのである（このうち前期古墳も2、3例ある）。この後期古墳のこれらの島嶼部での数の多さは既に樋口隆康、釣出正哉「平戸の先史文化」⁽⁴²⁾で指摘してあって、その中で「やはり大陸との交通と関連するものであって、それが刺戟となって文化が促進されて行ったと見ることができよう」と述べられている。もちろんこれらの政治的・文化的影響も考えられるが、それと同時に、鷹島をはじめとするこれらの島々が、漁撈をはじめとして、この三代遺跡がある谷底平野等の米づくりの生産基盤もしっかりしていた事も考えに入れておかねばならないところだろう。古墳作りの土木技術は谷水田の開発にも役立ったかもしれない。そして、おそらくこれらの要因は中世までひき続いてゆくものと思われる。中世までは、沖積地の水田よりも、この谷底平野等の谷水田が、良い水田であったといわれているからである。

註1 賀川光夫「晩期の様相と研究史。九州」新版『考古学講座』3、雄山閣、所収

註2 樋口隆康、釣出正哉「平戸の先史文化」平戸学術調査報告、京都大学平戸学術調査団
昭和26年

図 版

図版1

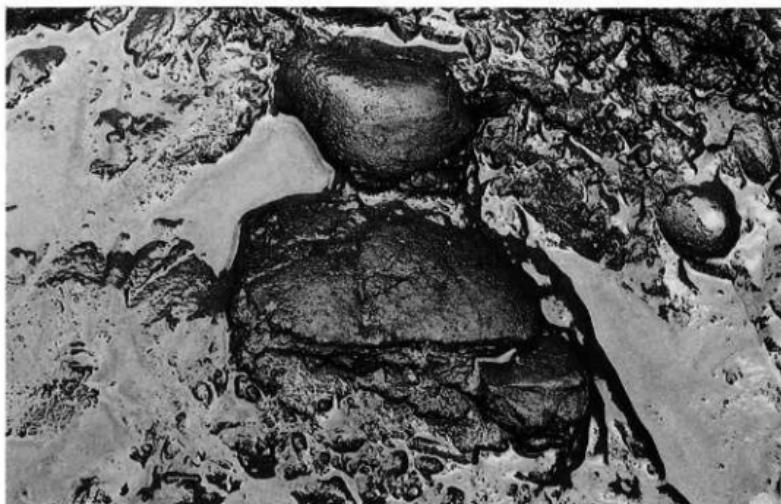


遺跡遠景（左側矢印：調査地点、右側矢印：宝ヶ峯1号墳）



三代遺跡土層

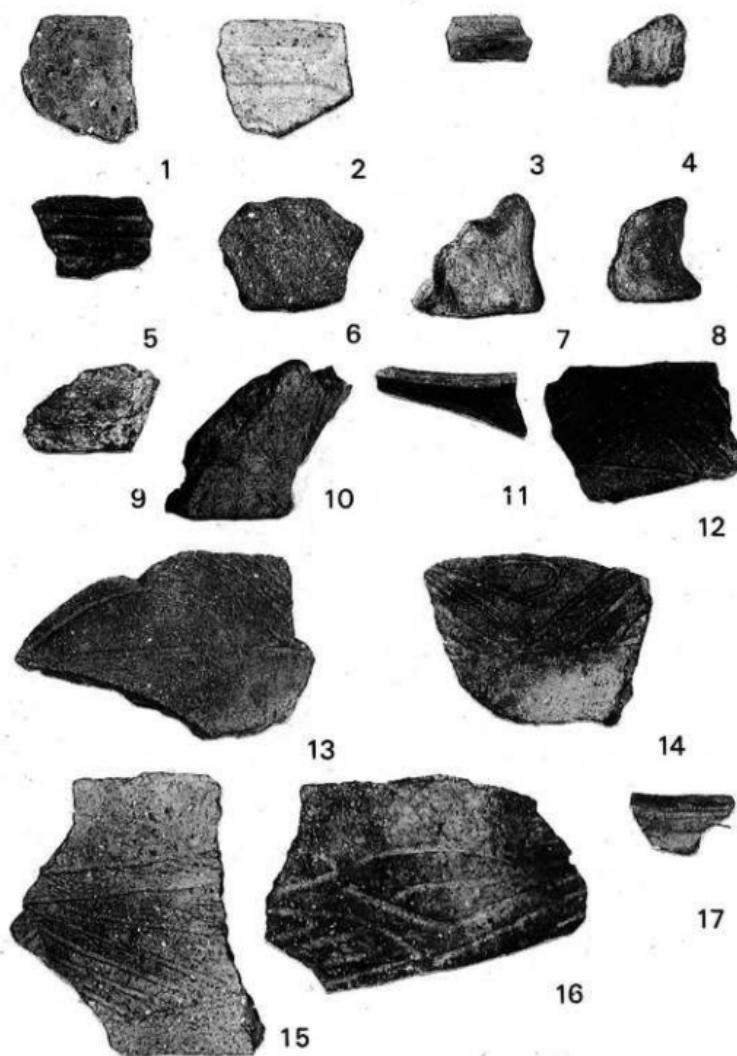
図版2



遺物出土状況

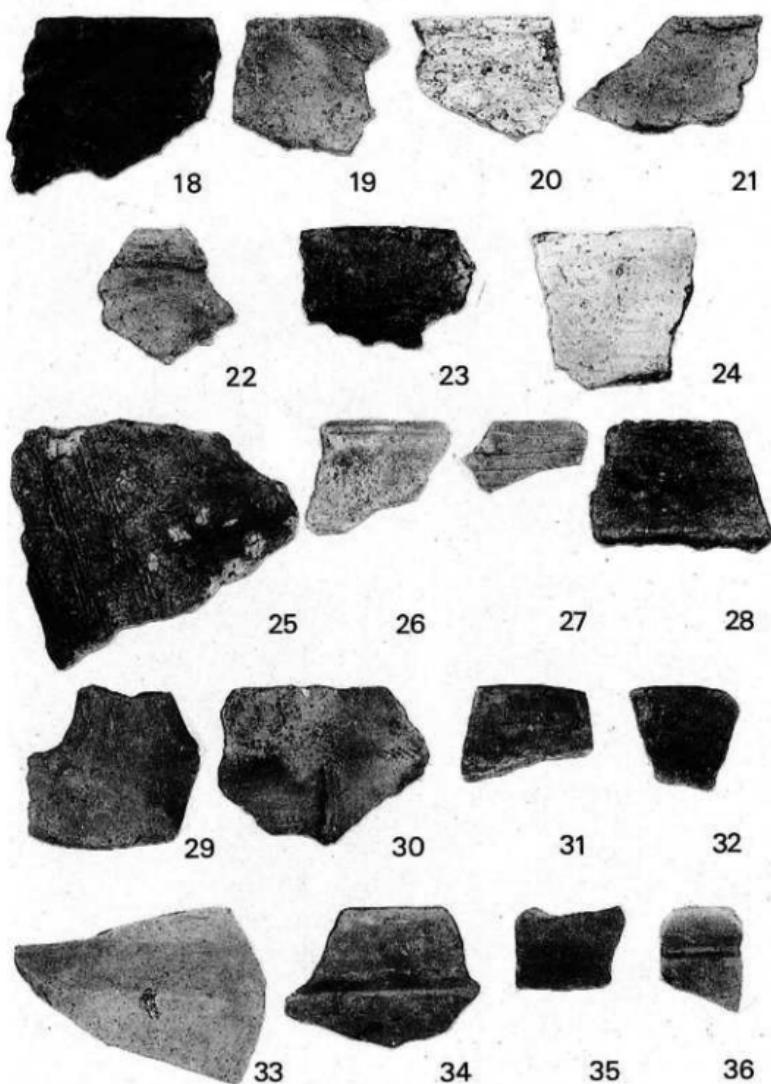


調査状況

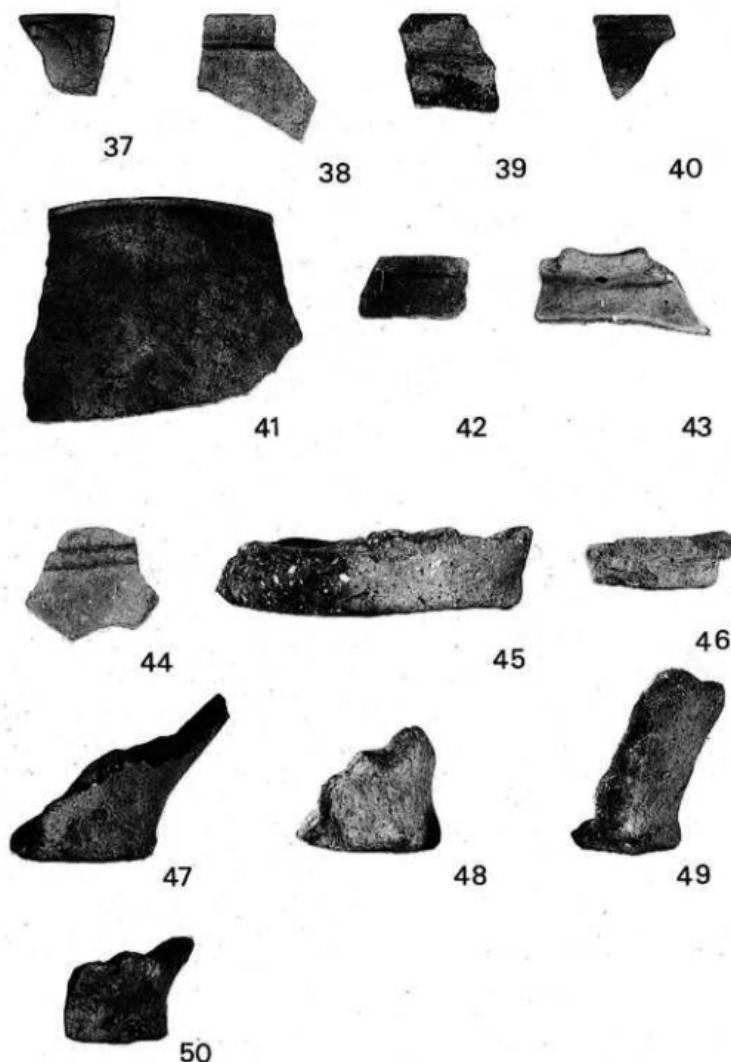


三代遺跡出土土器(1) 1/2

圖版4

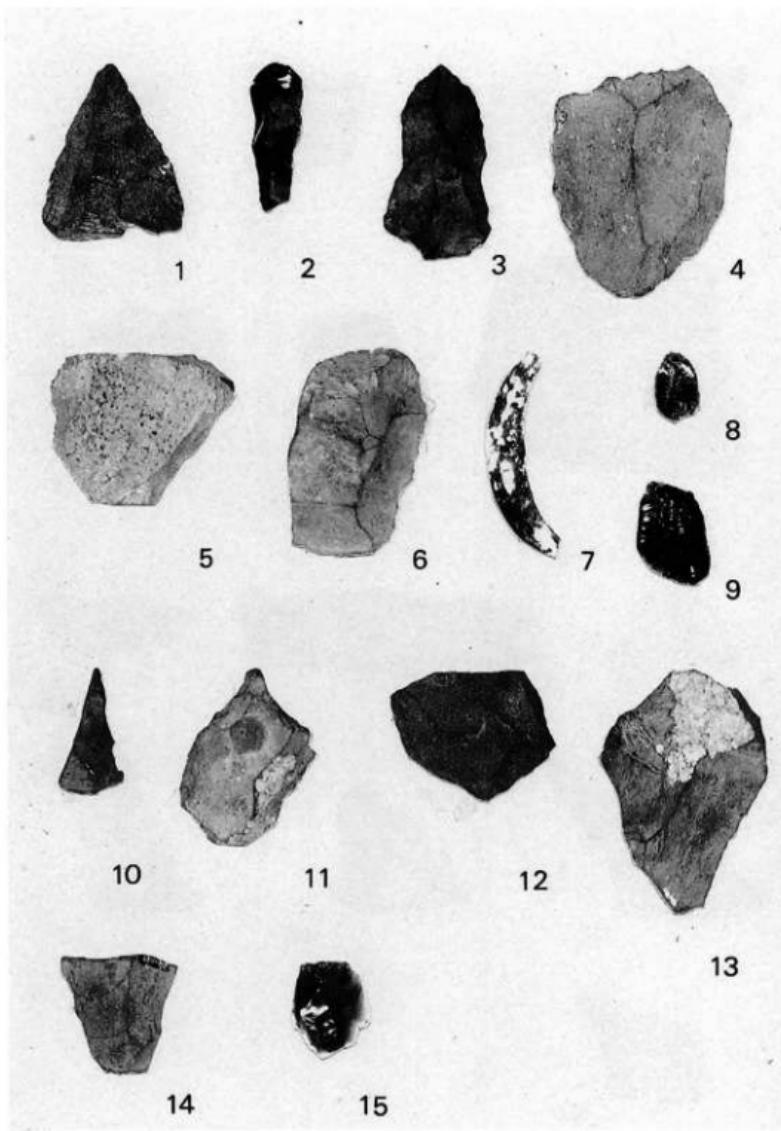


三代遺跡出土土器②1/2

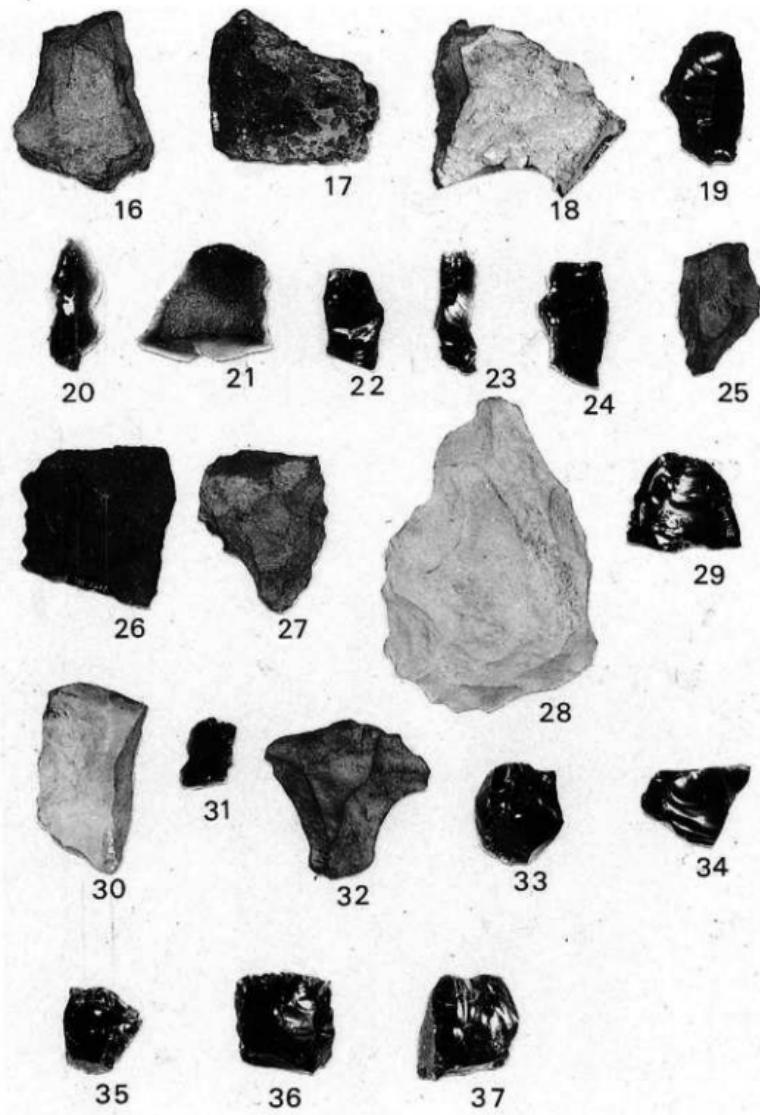


三代遺跡出土土器③1/2

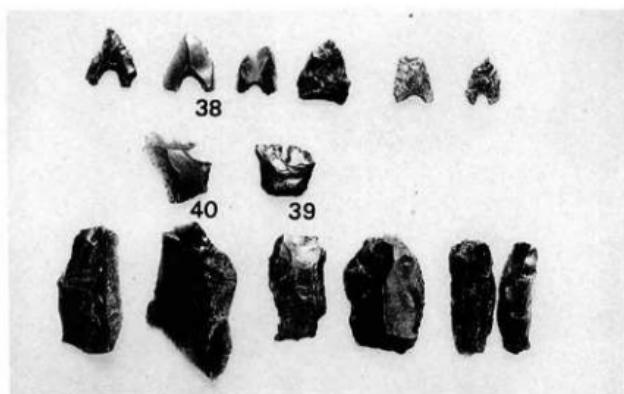
圖版6



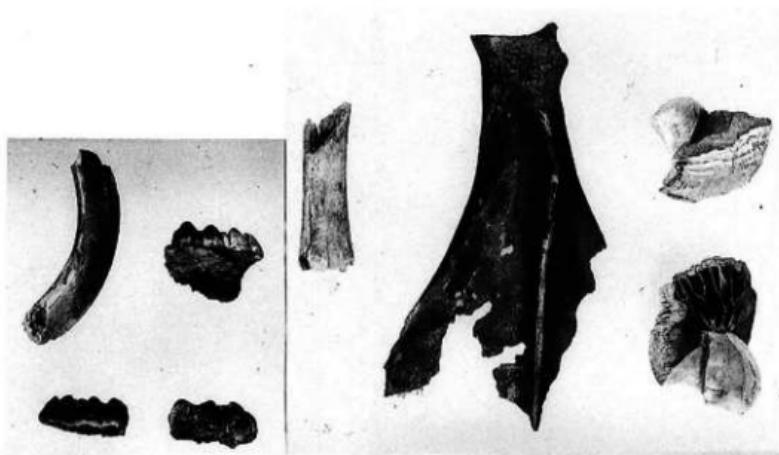
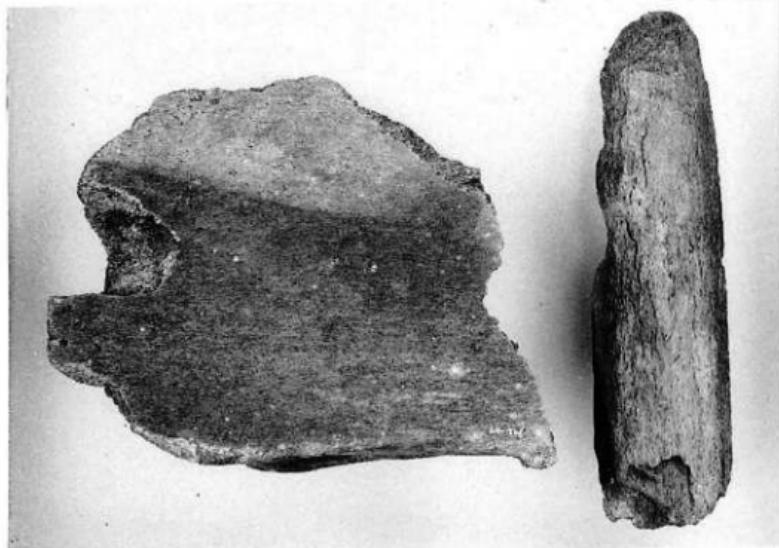
三代遺跡出土石器，貝塚①1/2



三代遺跡出土石器②1/2



三代遺跡出土石器③ $\frac{1}{2}$



三代遺跡出土の自然遺物 1/2

長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅺ

平成元年3月31日

発行 長崎県教育委員会◎

長崎市江戸町2-13

印刷 S K 印刷

長崎市宝栄町18-15